

「測り知れない神の力」

仙台国見教会 小泉 創



しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。Ⅱコリント4・7

私が東北の教会に遣わされて11年目になります。この間に東北にも様々な変化がありました。バイブルキャンプで育った若者たちの内で、学校や仕事の事情で他の地域に出て行った子も少なくありません。地域、教会の高齢化も進んでいます。教会に集う子どもたちも少なくなっています。東北教区11教会中3つの教会が兼牧です。そして二〇一一年3月11日の震災です。あまりにも広大な地域に被害の爪痕が残っています。さらに原発事故という容易には解決しない問題が生まれしました。現実の難しさや課題を考え始めると、無力感におそわれ、ため息が出てきます。

しかし冒頭にあげましたⅡコリント4章でパウ

ロは、現実におこる逆風、自分たちの限界、そこに神の測り知れない力があらわれると言います。時に私たちが倒れてしまうような状況を通して、神の御力が明らかにされます。つまり私たちが目を留めるべきは、現実の困難ではなく、その中に生きて働いてくださる神様の力なのです。私たちの目に不利に映ることの中でこそ、神様の力はあらわれます。人の目に最悪と見えた十字架を通して、神様の救いのわざがあらわされたように。

改めて目を上げてみますと、確かに神様の力は、あちらこちらにあらわされています。震災の後、多くの方が東北のために祈ってください、足を運んでくださっています。教会間のつながりもかつてないほどに盛んになりました。また、震災支援として他教区のキャンプに合流させていただく中で、広い範囲での子どもたち同士之交わりが生まれました。また福島のある教会では、長い間教会学校が開けるようにずっと祈っていたところ、教会学校が始められるようになったという証しも聞きます。教区でも教会間の協力関係が築かれてきております。

教会学校の働きの上にも、神の御力があらわれ御名をほめるときを期待しつつ、励んでまいりましょう。

牧羊者

目次

| | |
|-----------------------|-----------------|
| 巻頭言 | 1 |
| 目次 | 2 |
| 教師養成講座 | 3 |
| 「♪さんび・・・まず、あなたがいきいき！」 | No 3 |
| 旧約④「ヨシユア」 | ▲ 1 / 4 1 / 25 |
| キリストの教え | ▲ 2 / 1 3 / 8 |
| キリスト受難 | ▲ 3 / 15 3 / 29 |
| 牧羊ひろば（日田福音キリスト教会） | 90 |
| カリキュラム | 89 |
| 「牧羊者」のご購読・ご利用について | 90 |
| おわりに | 90 |

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教
団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出
版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子
どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以
上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビンググプレイズ）

ミセス・グレースからあなたに ♪さんび・・・まず、あなたがいきいき！ No.3

音楽工房 GRACE K&K(株) 田中恵子(神戸中央教会員)



子どもたちの好きな歌に「ゴールでイエス様と」がある。

♪

まだ見えない未来 思い あきらめないで
主がすべてを益とされる
無駄なことはない 私を導かれる
主よ あなたを信じます

ゴールでイエス様と 振り返りかたろう

・・・

つらい気持ちを味わったことも

なぐさめの中で喜びにかえられてる

・・・

イエス様と共に駆け抜けた日々は

まぶしい思い出 永遠の宝物になる

ノアミュージックの曲だ。中島みゆきさんばりのこの曲。人生経験のまだ少ない子どもたちが喜んで歌う。「つらい気持ちを味わったことも・・・主がすべてを益とされる、無駄なものはない。喜びにかえられる。」

この業界用語のオンパレード。だが、すべてアーメンなのだ。脱帽なのだ。

そう、そうなんよ！ 君たち！ 神様は生きておられる。だから頑張れ！ と叫びたい。小さいから、試練がないわけではない。小さいからすべてが守られているのでもない。小さいながらに戦いはある。自分で意思表示できない部分もある。けれど、子どもたちは子どもたち

なりに考えているはず。戦っているはず。

YOU ARE SPECIALという私のコンサー
トに欠かせない曲がある。

♪

世界に一人だけ、大切な人として

神様は君を造られたこと知ってる？

君にしかできない特別なことのため

この世の中に生かされている計画を

・・・

君の毎日がたとえ誰かが君を傷つけ

悲しみに出会っても神様は知ってる。

そう、そうなんよ！ 君たち、早く気づいて！ 君に

しかできないことのために造られたんだよ。生きること
には意味がある。あなたは高価で貴いよ。あなたは特別
な存在だよ。どんなに辛いことがあっても神様は、君を
守り、君のすべてを知っておられる。だから大丈夫なん
だよ。神様は君のことが大好きなんだよ。

私たち大人は、それ相当の期間？ 神様の訓練を受け
てきたはずである。

訓練にあつて意気消沈し、もう私なんか…という経験
を何度かし、そのたびに神様からの取り扱いを受けて、
そのたびに、反省もし、また再び立ち上がらせていただ
いたものはず…。自分の痛みに対しては本当に敏感。

でも他人のこととなるとどうだろう。ましてや子ども
のことになると。大人の考えの中で判断してしまいが
ち。こうしないといけないよ。ああしたらだめだよ…と
いう子どもに対してのアプローチではなく、自分たちが
経験した中から、神様の愛の深さや、すべてをよきに変
えてくださる神様のご計画を、実際の証しとして子ども
たちに話すのはどうだろうか。

私は、教会で生まれ育った。

駅から徒歩8分、だが、長い急な坂（健康坂という名）
を登らなければならず、登りきったら次は下り坂。その
途中にある教会。毎週にこにこして礼拝に来られるおじ
ちゃん、おばちゃんを見て、どうしてこんなに(^)されて
いるのだろうと小さいながらに思った。

伝道集会でみなさんのお証しを聞くのが大好きだった。にこにこして教会に来られるおばちゃんおじちゃんたちが、つらく大変な中を通ってこられたこともお証しで知った。でもそのお証しの中に必ず、神さまを第一にすれば、という言葉があった。

神様はすべてを益にしてくださるお方。その信仰があった。小さい私の心にも神様を第一にすることの大切さがわかった。神様を第一にしたらね、神様は祝福してくださるよ。思う以上のものをあたえてくださるよ。生き生きしながら私に話してくださった。

私の信仰の土台は、この母教会にある。礼拝を通して、説教を通して、賛美を通して、主にある人との交わりを通して教えられたことが、自ら体験した喜び、確信、平安、不安、動揺、落胆、失望などとうまく合わさって、良いものは残され、要らないものは削られて、心の財産となり、さまざまなことに立ち向かう術となる。

私は、今、あのおばちゃんたちのように、証しができているのだろうかと思わされる。折に触れて神様の素晴らしさを言葉にすること、その言葉を聞いて、即でなく

ても、必ず子どもたちは、心に大切なことを植え付けていく。そして、いつか、必ず蓄えた心の糧が必要な時が来る。信仰の継承は、何も肉親だけのことではないはずだ。私たちの周りにいる、教会の子どもたち、中高生たちもれっきとした神様の子どもだ。

子どもたちの通される場所はそれぞれ違い、味わうものもそれぞれ違うだろう。

困ったとき、不安なとき、教会学校で聞いたあの聖書のお話、温かく迎えてくれた先生たちの笑顔……。きっと彼らを励ますだろう。

私たちは性急にも子どもたちが神様を信じてほしいと強制しがちになる。しかし、一人ひとり神様の時は違うことも心に留めておきたい。

無駄なような種まきこそ、大切な神様の働きだと思ふ。時が良くても悪くても……というみことが心に響く。

ある時、CSの生徒が石垣から落ちた。幼稚園の子どもだった。頭を打ち手術となった。手術室に入る前、意識のあったその子は、主の祈りを祈ったという。

その子は無事に手術を終え、後遺症もなく成長し、今は教会の中心となって働いている。

聞かなければ、知らないままなのだ。語らなければ、神様を伝えなければ…。

すべてを益に変えてくださる方、涙や嘆きを喜びに変えてくださる方を知っている私たちだから。

強制ではなく、自然に。私が小さいときに聞いたあの証しのように。

「けいこちゃん、かみさまはね。必ずいちばんいいようにしてくださるよ」。



さて、ここからはワンポイントレッスン。

私は、関西聖書神学校で器楽実習と共に話し方も教えている。今年で3年目となる。ちょっとどんな講義がご披露しましょう。

もちろん、口をはつきりしっかり開けて、笑顔などはありません。背筋まっすぐ、口角あげて、おなかの底から…あたりまえ。目線の位置、全体を見渡して…。

人の前に立つという点では、CS教師も同じこと。参考にしていただければ。

相手の名前を呼んでのボールの投げ合い。手拍子ゲーム。1分スピーチ。3分スピーチ。

名前をきれいに書く。電話のかけ方、受け方。近所の人との挨拶の仕方。

初めての人との会話のきっかけの作り方。ほ・う・れ・ん・そ・うも。

いったい何？ この講義。ふふ、皆様、ご入学お待ち申し上げております。

これら、全部、人の前に立つ人に必要な大切なこと。当たり前のほうは別にして、後半のほうは、みんな相手のいること、相手のことを考えて動かないといけないことです。さまざまな配慮をしてこそ人前に立てるのだと思うのです。

主にあつて、人間的に魅力のある行き届いたご奉仕ができますようお祈りしています。まず、あなたがいきいき！ ね。

聖書 ヨシユア1・1～9 テーマ ヨシユア① 雄々しくあれ

序論

(高橋頼男)

出エジプト以来、今日に至るまでのイスラエルの歴史と歩みは、モーセという偉大な指導者なしにはありえなかったことです。しかも、今まさに約束の地へ進入しようとしている大事な時でした。このような時、モーセの死は決定的な影響を与える出来事でした。

一、モーセの死は、新しい前進の始まり(2～4)

モーセを失った今、一大民族となったこの民を誰が担い、持ち運び、正しく導くことができるでしょう。ヨシユアをはじめ民は皆、不安になりました。しかし、モーセの死は、神のご計画のうちにありました。そして、モーセを通して約束したが、モーセが生きている間はできなかったことを、神は今、後継者を立てて成し遂げようとしておられるのです。そこには、神がすでに準備しておられるご計画があり、神はそれを熱心に果たそうとしておられたのです。そのため神が選り備えておられたのが、モーセの従者、ヌンの子ヨシユアでした。

神は、ヨシユアに命じました。(今あなたと、このすべての民とは、共に立って、このヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に与える地に行きなさい。あなたがたが、足の裏で踏む所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるであろう。)と。神のご計画しておられる聖業には、遅れや中途半端、挫折はありません。(ピリピ1・12)。また、神のご計画は必ず速やかに進められなければなりません。

二、雄々しく、強くあれ(6、7、9)

主は、ヨシユアを繰り返し励まされました。指導者として大切なことは、堅く立って動かされず、強くかつ勇敢であることです。しかし、現実にはどんな人でも恐れがあり、おののきがあります。ヨシユアも例外ではありませんでした。

「彼は神と人からの、ありとあらゆる励ましと鼓舞を必要としていた。『強くあれ』とは、彼が弱さを感じていたことを意味する。『雄々しくあれ』とは、彼がおびえていたことを意味する。『おののいてはならない』とは、途中で仕事を放棄してしまうのではないかと彼が本気で考えていたことを意味する。彼は虫であって、人ではない」

(F B マイヤー「ヨシユアの生涯」)。ヨシユアに与えられた任務は、民を導いて約束の地に入り、その地を戦い取って嗣業の地として民に分け与えることでした。自分にそのような能力があるのか、勇気と覚悟をもって最後までそれをやりぬくことができるのか不安でした。しかし、神はすでにヨシユアに召しと賜物を与えておられました。(わたしは、モーセと共にいたように、あなたと共にいるであろう)と。彼が信頼して従う限り、神ご自身の力強い臨在を約束されたのです。

私たちの闘いは、この世にある信仰の闘いであり霊的闘いです。人々にキリストを証しし福音を宣べ伝え、人々の魂をキリストに勝ち取ることです。個人でも教会でも私たちが行って戦い取るべき、あなたが(足の裏で踏む)べき多くの嗣業の地があります。そこには多くの困難や問題、激しい霊的戦いがあります。しかし、ヨシユアを励ましてくださった主は、私たちをも励まし、共にいて勝利を与えてくださるのです。恐れおののくことなく、主に信頼して前進しましょう。

「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨ

ハネ16・33)。「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ28・20)。

三、全ての律法を守り行え(7-8)

神はヨシユアを励まされただけでなく、ヨシユアと民が律法の全てを守り行うこと、右にも曲がらず左にもそれず、主の律法に従ってまっすぐ進むことを命じました。明確な指針、決断のための確かな基準、力は、真理である神にあります。

そのために、律法が絶えず語られること、律法を昼も夜も思い巡らすこと、律法を状況の中で実践することが強調されました。み言葉を語り、黙想し、適用して実践することです。(そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう)と神は約束されました。

今の時代、私たちがみ言葉を守り行うことは決してやさしいことではありません。勇気が必要です。しかし、そこにこそ神の祝福があることを信じましょう。

結論

すべてのことが、かえって聖業の前進となることを信じ、恐れず勇気を持ち、神のご臨在とみ言葉に信頼して私たちの戦いを立派に戦いぬきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

今週から4回にわたって「ヨシユア」を取り上げる。今回は、その中でもヨシユアの出発点ともいえる箇所であり、モーセからヨシユアへと移行する場面である。時代の転換点には何事にも備えが必要である。この箇所は、特に信仰の戦いのための備えを語る箇所である。

テキスト

1 この節は、申命記とヨシユア記とをつなぐ役割をもつ節である。ヨシユア記全体の緒論としての意味も併せ持つ箇所でもある。**モーセの従者、ヌンの子ヨシユア**このヨシユアは出エジプトの最初からしばしばモーセとともに登場し、特に重要な局面では「モーセの従者」としての役割を果たしていた(出エジプト17・8～9、24・13、33・11、民数記11・24・29等)。このようにヨシユアは40年にわたる荒野での生活の中で訓練され、時いたってモーセの後継者として神ご自身によって立てられたのである。ヨシユアという名は、ギリシヤ語で「イエス」となり、「主は救い」という意味を持つ。

2～3 この箇所には、5・12までにみられるヨルダン

渡河と、5・13～12・24までに記されているいわゆる「征服」の箇所についてのあらましが記述されている。

2 わたしのしもべ**モーセは死んだ** ことの詳細は申命記34章を参照。現実を見、それを把握することは、主の民にとつて避けて通ることのできないことである。同時にこのことは、ヨシユアがその指導性を発揮できるようになるための神の愛と配慮に満ちた語りかけでもある。**与える** 2節の「与える」は分詞であり、この言葉の背後には、神がその民に課そうとしている働きの意図が含まれている。すなわち、約束の地は、神からの恵みの賜物として描かれる。しかし、この恵みの賜物をいただくためには人間の側で「ヨルダンを渡る」ことと「足の裏で踏む」という二つの条件が示される。神は土地を約束された。しかし、それはタナボタ的に与えられるという約束ではない。民は与えられた土地を獲得するために戦わなければならないかったのである。一方、3節の「与える」は完了形であり、神のご摂理の中では、領土はヨシユアの手に渡してしまっているのである。天においては既にこの行為は完了しているのである。あとは地上においてヨシユアの手によってそれを完成させるのである。

4 この記述は、並行記事として申命記11・24～25に見られる。特にこの節の理解に関しては、教会などに聖書地図がある場合はそれらを開きながら読むことをお勧めする。**荒野** ある限定した「荒野」(シナイの荒野のような)という意味ではなく、ヨルダン川西岸とその南側の地域の一般的名称。**レバノン** パレスチナ北部にそびえるシリヤの山脈地帯。**ヘテ人の全地** 申命記11・24にはこの記述はない。ヘテとはヒッタイト人のこと。**地中海** 地中海のこと。

6 強く、また雄々しくあれ この節のほかにも1・7、9、18にも繰り返し登場する言葉であり、ヨシユアを持つ責任を強調する言葉である。またヨシユアは申命記31・6、23でも同様の言葉をかけられている(31・6はモーセを通して)。また同様の言葉はダビデがその子ソロモンに(歴代上28・20)、またヒゼキヤがその民に対して(歴代下32・7)語っている。いずれも神の臨在と支えの言葉とが対になって語られている。ヨシユアはイスラエルの民を約束の地へと導くために、強く、雄々しくあらねばならない。しかし、それは単なるカラ元氣、カラ勇氣の類ではなく、神が共にいてくださるが故の勇氣

である(5、9)。

7～9 この節では、ヨシユアがイスラエルの民を約束の地へと導くための秘訣が示される。この節を通して、ヨシユアがモーセの律法への従順を欠いてはこのことをなせないことを示しているのである。ヨシユアが神の律法への黙想と服従とを第一とし、彼の指導は失敗に終わるであろうことを示唆している。

7 モーセがあなたがたに命じた律法をことごとく守って行い 申命記5・31～32、27・1、28・14等に登場する、申命記的律法の大きなテーマである。

8 ヨシユアは律法への従順を欠いてはこれらのことはなすことはできない。ヨシユアが神の律法への黙想と服従とを第一のこととしない限り、彼の指導は失敗に終わることになる(ヨシユア23・6、詩篇1・1～3)。

9 主が共におられる 主がモーセに語られた言葉と同じ言葉であり、信仰者にとってはこの言葉によって支えられ、また勇氣づけられる言葉である(出エジプト3・12、イザヤ43・2～5、マタイ1・23他)。

参考図書 リチャード・S・ヘス『ティンデル聖書注解ヨシユア記』(いのちのことば社) 他

聖書

ヨシユア1・1〜9

タイトル

新しいリーダー・ヨシユア

暗唱聖句

強く、また雄々しくあれ。

ヨシユア1・6

目標

信仰の戦いのために、み言葉による備えをする。

導入

(松浦みち子)

新しい年を迎えました。皆さんは「今年はこんなことに挑戦しよう!」と、希望に満ちていることでしょう。

さて、イスラエルの人々は、モーセに導かれ約束の地を目ざして40年間も荒野の旅を続けました。ところが、あと一步のところでモーセは死んだのです。120才でした。指導者をなくしたイスラエルの人々は、無事、約束の地に入ることができのでしょうか?

モーセの後継者ヨシユア

イスラエルの指導者モーセは死後、次にバトンを渡す人物について、神ご自身から「この人に任じなさい!」と命じられていました。「神の霊のやどっているヌンのヨシユアを選び、あなたの手をその上におき、彼を祭司エレアザ

ルと全会衆の前に立たせて、彼らの前で職に任じなさい」(民数記27・18〜19)と。任じるとは、役目につかせる、という意味ですから、大変なお役目ですね。

ヨシユアは、若い時からモーセに従ってきた人物でした。こんなことがありましたよ。ある時モーセに命じられて、仲間と一緒にカナンの地を偵察に行ったのです。すると仲間の多くは「モーセさん、無理です! 私たちには手に負えません。引き返しましょう」と報告しました。なぜなら、その地の人々の体格は大きく、町も石の城壁ががちりと囲まれていたのです。ちよつとやそつとでは太刀打ちできません。ところが、ヨシユアは「神様に信頼して戦えば必ず勝てる!」と断言したのです。このように、ヨシユアは若い日から神様を信頼する人でした。

ヨシユアへのチャレンジ

モーセは、イスラエル人をエジプトから連れ出すために立てられたリーダーでした。一方、ヨシユアは、イスラエル人を神の約束の地カナンに定住させるために立てられたリーダーです。ヨシユアは若い時から、モーセのそばで指導者のあり方を見て学んできました。しかし、いざ自分がリーダーになるとみると、「モーセさんのように、立派な

リーダーになれるのだろうか。みんなはわたしの言うことを聞いてくれるだろうか」と、不安が心をよぎったことでしよう。そんなヨシユアに神様はチャレンジされました。

命令①「ヨシユアとイスラエルの民は共に、ヨルダン川を渡って主が与えようとしている地に行きなさい」。

約束①「あなたが足の裏で踏む所はみな与える。モーセと共にいたように、ヨシユア！ わたしはあなたと共にいる」。

命令②「強く、雄々しくあれ。モーセが命じた律法をすべて守り行い、右にも左にも曲がってはならない」。

約束②「そうするなら、あなたは栄え、勝利を得る」。

「強く、雄々しくあれ」、この命令が、三度も繰り返されました。恐れや不安に押しつぶされそうになっているヨシユアを、神様が励ましておられることがよくわかりますね。フィギアスケートの選手たちがスケートの競技の前に指導者から励ましを受けて「大丈夫、さあ行きなさい」とリンクに送り出される光景を見たことがありますか。神様は、そのように、不安でいっぱいヨシユアの背中を押してくださっているのですね。「わたしが共にいるから大丈夫、強く、雄々しくあれ！」と。

ヨシユアの注意すべきこと

神様からのチャレンジを受け、リーダーとして立てられたヨシユアには、最も心すべきことがありました。何でしよう。それは使命を果たすために、注意して主の律法、み言葉を守り行うことでした。このことは、その人の努力や勇気よりも更に重要なことです。

偉大な指導者モーセでしたが、イスラエル人が荒野で言い争った時、神様からこう命じられました。「杖を取れ。会衆を集めよ、彼らの目の前で岩に命じれば岩は水を出す。あなたは彼らのために岩から水を出し、会衆と家畜に飲ませよ」と。しかし、民の不従順とつぶやく声にカッとなつて、売り言葉に買い言葉で叫びながら、手にした杖で二度も岩を打ったのです。モーセは「命じなさい」という神の言葉にそむき、岩を二度も打ったことにより、「あなたは人々をカナンの地に導き入れることはできない」という主の厳しい言葉を聞くこととなったのです。なんと厳肅な出来事でしょう。どんな時にも、神様のみ言葉に聞き従う者となりましょう。

♪雄々しくあれ♪（新聖歌486、ホ106、イン77他）

聖書 ヨシユア3・1～17 テーマ ヨシユア② 約束の地

序論

(高橋頼男)

神の命令によって、いよいよ約束の地に入ろうとするヨシユアとイスラエルの民ですが、そのためには、どうしてもヨルダン川を越えなければなりません。ヨシユア3章は、ヨルダン渡河の驚くべき記録です。(生ける神があなたがたのうちにおいでになり、あなたがたの前から、カンびと、エブスびとを、必ず追い払われることを、次のことによって、あなたがたは知るであろう)とあるように、この大いなる不思議を伴うヨルダン渡河は、続く約束の地「カナン」進入のための試金石でした。

一、不思議を行われる神(1～13)

シッテムからヨルダンにまで来た民は、そこで三日間留まりました。この間、ヨシユアは何をしていたのでしょうか。満水の雪解け水をたたえて勢いを増して流れるヨルダン川を眼前に、思案していました。一行の中には、女、子ども、老人、そして、たくさんの家畜がいました。これらを伴って、ヨルダン川を渡るのは、並大抵のことではあり

ません。どうしたらよいかわからず、ただ、神のお言葉を待つほかありませんでした。その時、神はヨシユアに語られたのです。(あなたは契約の箱をかく祭司たちに命じて言わなければならない、『あなたがたは、ヨルダンの水ぎわへ行くと、すぐ、ヨルダンの中に立ちとどまらなければならない』と。神の箱をかく祭司たちの足の裏が、ヨルダンの水の中に踏みとどまる時、ヨルダンの水は流れをせき止められ、上から流れくだる水はとどまって、うず高くなると言われたのです。神のみ言葉を聞いたヨシユアは、民に「あす、主があなたがたのうちに不思議を行われる」と言いました。「不思議」とは、驚くべき事柄、神のなされる奇跡のことです。かつてエジプトにおいて、主がモーセを通してなされた数々の奇跡(出エジプト3・20)を思い起こさせました。

私たちが仕えている主は、生ける力ある神であって、昔も今も不思議を行われるお方です。

二、全き信頼と服従(14～17)

神の不思議は、み言葉への全き信頼と服従があつてこそなされます。祭司がヨルダン川の水の直前まで来ても、奇跡は起こりません。その足が一步踏み出し、実際に水の中

に浸るその瞬間、不思議は起こったのです。

「箱をかく者がヨルダンにきて、箱をかく祭司たちの足が水ぎわにひたると同時に、…上から流れくだる水はとどまって、…全くせきとめられた」。奇跡が起きてから川を渡るのではなく、信仰の行いが先に必要なのです。川の水が未だ両岸に満ちている時、足を水に踏み入れることは難しいことです。しかし、信仰とはまさにそのことなのです。聞いたみ言葉に信頼して従うことです。大切なのは、現実がどうであるかではなく、み言葉がどう語られているか、ということです。神は状況を造り出し、支配し、またその状況を変えることができるお方です。

「信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです」。「彼の信仰は彼の行いとともに働いた」（ヤコブ2・17、22 新改訳）。

三、神を畏れ自らを清くする（35～55）

民は、自分たちの先を行く主の契約の箱に従っていくこと、その神のご臨在を表す聖なる契約の箱との間にはおよそ二千キュビト（900m）の距離をおき、それに近づいてはならないことを命じられました。聖なるもの、聖なるお方を畏れるべきことが教えられたのです。

さらに、（あなたがたは身を清めなさい。あす、主があなたがたのうちに不思議を行われるからである」と、神の驚くべきお働きを目の当たりに経験する民は、清くあるべきことを命じられました。このきよめは、外面的、実際的には身をきよめ、衣服を洗い、女性から身を慎むことを指したようですが、内面的には、真に神を畏れ、不信仰や高慢を取り去り、主の前に徹底してへりくだり、全き信頼を主にささげることです。聖なる神のくすしい御業にあずかるためには、民は、自身のあらゆる汚れや不遜から聖別されるべきことが命じられているのです。

このようにして、ヨシユアと民はヨルダンを渡りました。神が先立ち、驚くべき不思議をもつて道を開いてくださったのです。神の約束の地を獲得していくことは真に困難な戦いですが、必ず神が先立つてくださり、道を開いて下さることを信じることができました。

結論

神が命じられる道には必ず困難があります。しかし、不思議を行われる神を信頼し、自らをきよめ、大胆な服従をもって前進しましょう。そして、神の約束されている嗣業の地を獲得していきましょう。

研究資料

(宮澤清志)

本章とそれに続く第4章とは、イスラエルのヨルダン渡河の準備から完了に至るまでの物語である。特に本章では渡河の準備と(1・13)、川における奇跡の報告(14・17)とで構成される。

テキスト

3 箱 詳細は出エジプト25・10・22にある。箱は最も重要な祭具で、聖所全体の中心ともいえるものである。この箱は神の臨在のしるしとみられた。**レビびとである祭司たち** レビ人は、古代イスラエルにおいて特に神に近く仕えたとされた集団である(民数記3・12、8・16等)。本節のように、神の契約の箱をかつぐのは、レビ人の務めとされていた(ヨシユア8・33)。

4 二千キュビト 約900メートル。1キュビトは約45センチメートル。イスラエルの民が聖なるものに近づきすぎることは危険であると信じられていたのである(サムエル下6・1・11)。

5 身を清めなさい きよめるとは(へ)カードシュ・切り離す、という意)、自分自身をこの世のあらゆるものか

ら切り離して神のものとする、という意味をもっている。具体的には着物を洗うことと、性的関係を慎むことなどが含まれていたと考えられる(出エジプト19・10・25)。しかし、何よりもまず、自らの身をもって神を信頼するという行為が求められていた。**不思議** 奇跡のこと。それによって主がその力を示される、不思議な、あるいは恐るべき出来事を指している。なお、新共同訳では「驚くべきこと」と訳している。

6 前節に「あす」とあることから、前節の翌日のことであろう。 ヨルダン渡河はここから始まる。

7・8 先週見たヨシユアへの主の語りかけ(1・1・9)に続く主の語りかけである。神の臨在の約束(7)とヨシユアへの指示(8)という内容は、1・1・9にも見られたものである。不思議(5)すなわち奇跡の意図は、神がモーセといたように、ヨシユアとともにいることをすべてのイスラエルの前に知らせること(7)であった。この点においても、モーセとヨシユアとの類似性を見ることができる。

10 神は、約束にしたがってカナンの地をイスラエルに渡される。10節には、その原住民のリストが描かれてい

る。このリストは、創世記15・19～21、出エジプト3・8、17、23・23、33・2、34・11、申命記20・17他にも登場する。**カナンびと** 旧約聖書においてはしばしばイスラエルによる征服前のパレスチナの住民の総称として用いられた(創世記12・5～6)。**ヘテびと** ヒッタイト帝国の残存民の一部(1・4参照)。**ヒビびと** カナン中央のシケム、ギブオン周辺をその主な居住地としていた。彼らはヨシヤを欺(あそ)んで和を講じ、滅ぼされることを免れた唯一の民族である。**ペリジびと** カナンびとと並んでしばしばカナン先住民の代表としてあげられていた。**ギルガシびと** カナン先住民の一つであるが、はっきりしたことはわからない。**アモリびと** パレスチナ中央部の先住民の名。**エブスびと** 山地にすんでおり、ダビデ時代にはエルサレムの町を支配していた民族である。ちなみに「エブス」とはエルサレムの別称である。**生ける神** 原語には定冠詞がついており、周囲の民の神々のように死んだ神とは区別することを意図して用いられた言葉であろう。

11 全地の主 神はこの地上のすべてをご支配される神である。神はヨルダンの川をも支配される神であるとい

うことを言外に語っている。

12 詳細は4・2以下を参照。

13 本節において神の「不思議」が明らかとなる。

14 17 13節で語られた主の「不思議」が具体的な出来事として展開される。この箇所を中心はイスラエルの民ではなく、「祭司たち」である。

14 祭司たちは契約の箱をかき、民に先立って行った主の戦いにおいては、いつも主が先立たれる。この奇跡も、主の臨在の象徴である契約の箱が先立って進んだ。

15 ヨルダンは刈入れの間中、岸一面にあふれるのであるが、刈入れの時期とは4月初旬のことであって、この時期はヘルモン山からの雪解け水でヨルダン川は岸まであふれており、ヨルダン川の流れも非常に激しかった。

16 アダム ヨルダン渓谷にあるエリコの北およそ30キロメートルにあるテル・エド・ダミエと同定されている。

アラバの海すなわち塩の海 死海のこと。

17 こうして、出エジプトと同じ出来事が起こったのである(出エジプト14・21～22、29)。

参考図書 1月4日分と同じ。

聖書

ヨシユア3・1〜17

タイトル

約束の地に入る

暗唱聖句

ついに民はみなヨルダンを渡り終わった。
ヨシユア3・17

目標

神が約束し、導かれたところに、信仰によって進み入る。

導入

(松浦みち子)

新しいリーダー、ヨシユアはその後どうなったのでしょうか。神様からの励ましをいただいたヨシユアは、すぐに命令どおりヨルダン川を渡る準備をしました。イスラエルの人々も、神様がヨシユアを新しいリーダーとして選んで下さったことを信じ、「ヨシユアさん、私たちは、あなたがおっしゃることは何でも行います。どこにでも行きます。モーセに従ったようにあなたに従います」と答えました。人々に信頼されて、ヨシユアはどんなに心強かったことでしょう。

ヨルダン川を渡る

ヨシユアを先頭にイスラエル人はヨルダン川の岸まで進み、三日間そこに留まりました。目の前のヨルダン川

は、ちょうど雨期の冬が終わった時期だったので、水かさが増し、あふれるほどの勢いでゴーゴーと音を立て、渦を巻きながら流れていました。川には橋がありません。イスラエルの人々の中には、子どもや老人もいます。しかし、川向こうには神様が下さるすばらしい約束の地があるのです。何としても渡って行かねばなりません。さあ、君たちだったらどうしますか？（生徒に考えさせる）

イスラエル人たちは、三日間、渦巻く川の流れを見ながら、自分たちの力ではどうすることもできない、神様の助けがなければとうてい向こう岸に渡れないと、誰もが心から思いました。ヨシユアは三日たってから神様のお言葉を伝えました。「神様が明日、不思議を行われま

す。祭司たちが神のお言葉が入っている契約の箱をかっ

いでいるのを見たなら、あなたがたはその後について進

みなさい。ただし、契約の箱には二千キュビト（900メー

トル）の距離をおいてそれ以上近づいてはいけません。

そして、身を清め神様のなされる不思議を待ちなさい」と。

人々は、ヨシユアの言うとおりにして出発の準備を整えて待ちました。翌日、初めて神様は川を渡る方法を示して下さいました。それと共に、イスラエル人にヨ

シユアが新しいリーダーであること、主が共におられることをはつきりと知らせて下さいました。人々はヨシユアに従って行くことを決心しました。

一步を踏み出す

いよいよ契約の箱を担いだ祭司たちが前に進み始めました。ヨシユアは祭司たちに「契約の箱を担ぎ、みんなの先頭に立って川に入りなさい。そしてヨルダン川の中に踏みとどまりなさい」と命じました。祭司たちは命令どおりにゴーゴーと渦巻く川に向かってグングン突き進んで行きます。人々は息をこらして見守っています。祭司たちの足が川の水に踏み入れられたとたん、「あっ！」と驚く不思議なことが起こったのです。川上から流れ下る水は突然つつ立ってとどまり、川上のはるかかなたの町アダムのあたりで、うず高く立ち、せきとなつて水は完全にせき止められたのです。「わあー、やったあー」川の中に乾いた道ができたのです。みんなは歓声を上げながら大人も子どもも家畜も、何にも心配しないで向こう岸へ渡りました。契約の箱を担いで川の真ん中に立っていた祭司たちが川から上がってくると、川の水は何事もなかったかのように、ゴーゴーと音を立て流れ始めまし

た。神様は約束どおり不思議なことをして下さったのですね。なんと素晴らしいことでしょう。

名古屋教会、会堂取得物語

昔も今も変わらない神様のみ業のあかしをしましう。名古屋教会は、開拓以来40年もの長い間借家の教会でしたが、40年目の二〇〇九年11月30日に真向いの製菓工場の社屋を購入しました。9月に売り出しの旗がひらめき、2週間後には購入することを決断しました。「ヨルダンを渡り、わたしがイスラエルの人々に与える地に行きなさい」(ヨシユア1・2)のみ言葉が与えられたのです。手持ちのお金は750万円。物件の売り値は5千万円。到底手の届く額ではありません。信徒も20数名の小さな教会です。しかし、信仰の一步を踏み出したとき、40日間で献金と無利子の融資で金額が満たされ、約束の日に全額を支払うことができました。未信者の売主が「人にはできないが神にはできる」とのみ言葉を口走り、まさに神業だ！と驚いていました。地域の人々も神様の力に驚いています。信仰の一步を踏み出す時、神様はその不思議な力を現して下さいますね。ハレルヤ！

♪威光・尊厳・栄誉♪(新聖歌166)

聖書 ヨシユア6・1～20 テーマ ヨシユア③ エリコの城壁

序論

(高橋頼男)

ヨルダンを渡りカナンに進入したヨシユアとイスラエルの民の前に、エリコが立ち塞がっていました。カナンに入して約束の地を獲得していくためには、どうしてもまずエリコを攻略することが肝要でした。エリコは、古代からのオアシス都市であり、難攻不落の城壁を誇る町でした。出エジプト以来40年、荒野を彷徨^{さまよ}ってきた難民集団が、どうしてまともにエリコと戦い、攻略することができるでしょうか。改めてエリコを眼前に仰ぎ見たヨシユアは、どう戦ったらよいのか途方にぐれました。しかし、この戦いは人間の戦いではなく、神が戦われる戦いです。したがって、人間の方法で勝利するのではなく、神の方法で勝利するのです。エリコは、神ご自身と神の方法による勝利によって初めて勝ち取られるのです。

一、主を軍勢の将として迎える(5・13～15)

エリコ攻略のために思案していたヨシユアの前に、いきなり抜き身の剣をもった一人の人が立ちました。ヨシユア

は思わず「あなたはわれわれを助けるのですか、それともわれわれの敵を助けるのですか」と問いかけました。その人は「いや、わたしは主の軍勢の将として今きたのだ」と言いました。ヨシユアはそのお方の前で地にひれ伏して礼拝し、足のくつを脱ぎました。そのお方こそイスラエルの主であるお方でした。そこで主はヨシユアに驚くべきエリコの攻略方法をお示しになったのです。

主を軍勢の将としてお迎えし、ひれ伏して礼拝すること、み前に足から靴を脱ぎ、戦いの主権をこのお方に完全に明け渡すことが神の方法による勝利の第一歩です。

二、主の言葉を信じる(6・1～2)

主は、これから私はあなたに味方して、奇跡を起こし、強大な町とエリコの王と大勇士を打ち負かさう、そして、町をあなたと民に与えようと言われたものではありません。わたしは、すでに「あなたの手にわたしている」と、戦いが勝利をもって完了したかのごとく宣言されたのです。何のしるしも兆候もなく、説明もその過程も語られず、ただそれだけのことを言われたのです。ヨシユアは「アーメン」と信じて受け入れました。それが信仰です。

信仰とは、告げられたみ言葉を信じることですが、しか

しその信仰はたしかに「望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認すること」(ヘブル11・1)です。神の信仰は私たちへの説得や納得ではありません。人間の合意や可能性でもありません。それは、ただ神の言葉を信じることです。しかし、そこに神の方法による勝利の第二步があります。

三、主の言葉に従う(6・3～20)

さらに、神の言葉を信じるということはお言葉ですからお従いしますと、そのごとく信じ従っていくことです(ルカ5・5)。しかし、主のお言葉に従うことは、ほんとうに難しいことでした。

主のご命令は、六日間エリコの町を一日に一回、回らなければならぬ。七人の祭司がラッパを吹き鳴らし、主の箱をかく者はそのあとに従わねばならない。七日目には七回、回らねばならない。そして、民が大声で呼ばわるとき、エリコの町の石垣は崩れ落ちる。その時、民は町に乗り込み、その町を占領することができる…というものでした。果たして、ただこれだけのことでこの巨大なエリコの町が崩れるのだろうか。まことに信じがたいことです。何もせず、ただ町の周りを沈黙してひたすら歩くというのです。

愚かで、たわごとのように思えてくる神の言葉です。沈黙の中にただひたすら歩きながら、「こんなことで大丈夫なのか、こんなことをしていいのだろうか」と、ヨシユアや民にふと疑念が湧いてきたかもしれません。しかし、とにかくにも、ヨシユアと民は、この主の命令に従って、大真面目で主のお言葉を実行したのです。この戦いは「それは、戦闘態勢ではなく、宗教行事の行列だった。戦争自体が礼拝行為になっているのはエリコの戦い以外には見られない」(鍋谷堯爾)と指摘されるほどの異例の戦いでした。信じ従うということは、主のお言葉が分からなくても、まるで愚かのように思えても、ただ神のお言葉に信頼し、ひたすら聴き、そして従うことです。これこそ神の勝利の最終歩でした。その結果、ヨシユアと民は、驚くべき圧倒的な神の勝利を経験したのです。

結論

今日も、難しい問題や課題を抱えている私たちですが、主に明け渡し、み言葉にひたすら聴き、お言葉に徹底して従うことこそ、神の方法による勝利の道と心得ましょう。ここに人知を超えた神の力あるご支配があるのです。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 エリコ ヨルダン川西岸、死海の北約10キロメートルあまりの場所にあった町。オリエント世界最古の要塞都市の一つとされている。イスラエルの人々のゆえに エリコの住民は、イスラエル軍の侵攻の前に震えおののいていた(2・9、11、5・1等参照)。

2 5節まで、主がヨシユアに対して出されたエリコ陥落のための具体的な指示が語られる。本節はその指示の要約である。主 5・13～15に登場する、主の軍勢の将と考えられる。見よ、わたしは……わたししている エリコに対する勝利は神の賜物であり、この勝利が神の意志によつて既にすでに達成されたものであることをあらわしている。特に、わたししている という言葉は完了形であり、そのことを端的に物語っている。実際の占領は、神の側の既成の事実がこの地上において展開され、遂行されるにすぎないのである(天的既決定の地的追決定)。

4 七人 七日目 七度 「七」は、古代イスラエルでは聖なる数であり、また「完全数」であるとも言われている。

特に、宗教的祭儀には七という数字は重要である(レビ4・6、8・11、16・14等)。雄羊の角のラツパ 通常、戦争(歴代下13・13以下)と礼拝式(民数記10・1～10、詩篇47・5)において用いられた。

これまでの節からもわかることは、エリコの城壁の崩落の出来事は、イスラエルの民の軍事的行為ではなく、宗教的行為であるということである。同時にこの行進は、信仰者の信仰の歩みの行進であるとも見ることができる。

6～7 前節までの主の指示に従つて、ヨシユアが命令を下す。契約の箱 先週の研究資料(3・3)を参照。

8～11 主の指示(2～5)に従つて下されたヨシユアの命令(6～7)は、その民によつて遂行された。この箇所の詳細は、すでに前の箇所によつて確認されている。ここで再びその詳細を記す。

まず、武装した者(4・13、6・7、9) が存在していたことから、これらの一連の行進は宗教的行為であると同時にやはり軍事的な行進という要素も加わっている。それは、主の軍勢の将(5・15)の存在からも明らかである。しかし、本日の聖書箇所全体の文脈から見ると、やはり第一義的にはこれら一連の行動は宗教的行為である。な

お、この武装した者（ヘハルーツ）は、戦闘の備えができている者、という意味を持ち、スポーツにおける前衛といった意味合いの言葉である。

次に、**雄羊の角のラツパ**（4、8、他）は、聖書では民に戦いに対する備えをするようにとの準備や、聖なる行進のために用いられている（民数記10・9他）。しかしここではこのような意味以外にも、主の臨在を示し、また主の解放を示す意味合いもあった。

そして、**町を巡（る）**（4、7、11、他）という言葉は詩篇48・12にも用いられており、シオン（エルサレム）を巡る巡礼者の巡礼の姿を示している。

しかし、この箇所がその前後の箇所と決定的に異なる点は、「**あなたがたは呼ばわってほらない。…**」（10）というくだりである。イスラエルの民は、この戦いが主の戦いであることを徹底的に知る必要があった。主の戦いに人間のときの声は不要である。

12～14 基本的には前節までの一日目の行動と同じ。

15～16 主がヨシユアに命じられた7日目の指令（4～5）が実行される時が来た。

17～19 **滅ぼ（す）**（聖絶する、滅ぼし尽くす） 旧約聖書、

特に申命記とヨシユア記では重要な思想のひとつである。イスラエルでは、戦争は宗教的行為である。それゆえ敵は「ヘーレム、主にささげられるべきものとして滅ぼし尽くさなければならぬ」とされていた。7章に登場するアカンは、この滅ぼし尽くすべきものを惜しんで横領し、一族もろとも滅ぼし尽くされた。戦争が聖なる戦争であるため、戦争に加わる者も聖なる者とされた。カナンの町々を攻略する者は、そこに住む人々を聖絶しなければならぬ（申命記20・16～17）。なぜならば、彼らの偶像礼拝は不浄であり、それを除くことによつて、主の聖さは保たれるからである。この点がおろそかにされるとイスラエルの民は偶像礼拝に惑わされ、主の怒りを招くことになる。イスラエルが聖なる民であり続けるためには、異教の偶像礼拝から切り離されなければならないのである。そうでなければ、アカンのように、自らが滅ぼされるべき者とされることになるのである（18）。ただし、金、銀、青銅、鉄およびそれらで造った器は、聖別されたものであつて、主の宮に携え入れなければならない（19）。

参考図書 1月4日分と同じ。

聖書

ヨシユア6・1〜20

タイトル
暗唱聖句勝てるよ！ 神様の方法でなら
そうすれば、町の周囲の石がきは、くず
れ落ち、民はみなただちに進んで、攻め
上ることが出来る。 ヨシユア6・5

目 標

人間的な方法でなく、神の方法によって
勝利を得る。

導入

(和田 治)

「たっ、たっ、大変だ〜！ ヨルダン川の水が干上がって、イスラエルのやつらがぞろぞろと渡ってきたんだ。もうすぐやってくるぞ！」「何だって？」エリコの町の人々は、もうパニック！ 先週、ヨシユアが率いるイスラエルの民が、神様の奇跡の力でせき止められたヨルダン川を、歩いて渡ったことを学びましたよね。その川からそう遠くはない、最初の町、それがエリコです。その町の人たちは、イスラエルの民を恐れ、門を固く閉ざしていました。「大丈夫！ 俺たちには、この頑丈な石垣がある。いくらやつらでも、この石垣を打ち崩して町に入ってはこれまい！」そうです、エリコの町はものすごく頑丈な壁に囲まれた、強

い町だったんですね。ところが、神様はヨシユアにおっしゃったのです。「あなたたちはもう勝ったも同然だ。すでにこの町はあなたたちにわたしている！」さあ、今日は、神様がイスラエルの民に、どんな方法で勝利を与えてくださったかを見てみましょう。

不思議な御命令に従うヨシユアたち

神様はヨシユアに、こうお命じになりました。「あなたがたはみな、町のまわりを一度回りなさい。七人の祭司たちは、雄羊の角のラッパをもつて、神の箱の前を進むのだ。六日の間そのようにしなければならぬ。少しも声を出してはならないぞ。そして七日目には七度、町の周りを回りなさい。そうしたら、祭司たちは雄羊の角のラッパを長く吹き鳴らすのだ。それが聞こえたら、民はみな大声で叫びなさい。そうすれば、町の周囲の石がきは、くずれ落ち、民はみなただちに進んで、町を攻め上ることが出来る！」あれれ？ ただだまって町の周りを歩くだけ？ そんなことで、とてつもなく頑丈なこの町を攻め取ることが出来るの？ 皆さんならどう思いますか？ 神様がお命じになった通りにするでしょうか？

「おやおや、いったいあいつらは何をやってんだ？」エ

神様による勝利が！

イスラエルの民は、どうやったらエリコの町を攻め取る

まとめ

♪主のPOWER♪
(G S 36)

聖書 ヨシユア24・14、15
テーマ ヨシユア④ 神に仕える決心

序論

(高橋頼男)

モーセの後を継いだヨシユアは、不信仰と不従順のイスラエルの民を導いて、ついにヨルダンを渡ってカナンの地に入りました。約束の地における戦いを続け、ようやくカナンの地に民を安住させることができました。

死期が迫ったヨシユアは、全イスラエルを前にし、民の行く末に一抹の不安を抱きつつ、心を込めて決別の説教をしました。そして、最後に「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。わたしと、わたしの家は共に主に仕えます。」と、自ら主に仕えることを宣言し、民に向かって鋭い信仰の挑戦したのです。

一、決定的な選択

主に仕えるのか、それとも他の神々に仕えるのか、どちらの神を選ぶのか、何を神として仕えるのか、それはまさに決定的な選択です。人間の運命を左右する選択だからです。この選択に、これからの人生が、永遠までもがかかっています。しかも、だれもこの重大な選択を避けることは

できません。本当の神に仕えていない人は、必ず偽りの神を造り出し、それぞれの偶像に仕えるようになるからです。自分のやりたいこと、仕事、お金、知識、肉欲、等々、これらの正体は「自己欲」です。「彼らの最後は滅びである。彼らの神はその腹、彼らの栄光はその恥、彼らの思いは地上のことである」(ゼリビ3・19)。

私たちが自分のために生きること始めるなら、必ず、自分自身の弱く不安定な、みじめな罪人としての姿を見せつけられることでしょう。まことの神を選び、真の神に仕える者だけが本当の生き方を発見し、ほんものの喜びと永遠のいのちを神の愛の中に見出すのです。

「それゆえ、いま、あなたがたは主を恐れ、まことと、まごころと、真実とをもつて、主に仕え、…他の神々を除き去って、主に仕えなさい。」

二、一人一人の選択

神様は人間創造において、一人一人に選択をする自由と権利をお与えになりました。「人間が創造された目的は、愛(です)。人は神と愛し合うため、人間同士たがいに愛し合うために造られたのです。…愛するということにだれかに強要することはだれにもできません。(強要された愛

は、愛ではありません。)愛は自発的に選ぶものです。裏を返せば、愛することを選ぶことができるということは、愛さないことを選ぶこともできるということです。ここに創造における愛のパラドックス(矛盾)があります。「人が善に傾くか悪に傾くかは、神と人との関係にかかっています。その関係が健やかであるときには、人は善を選びとることができます。逆に、神との関係に問題があるなら、人は悪に傾いていく(悪を選択する)」のです(大頭真一『聖書は物語る』傍線と括弧内筆者)。

ささげものにおいて、神との関係における問題が明らかにされたカインは、やがて悪に傾き、悪を選び取ってしまいました(創世記4章)。神を愛し神に仕えるためには、私たちは罪と悪を捨てなければなりません。自分の栄光に別れを告げなければなりません。罪のほかない楽しみに、断固、「否!」と言わねばなりません。神に仕えることは、払うべき代価、背負うべき十字架があるのです。しかし、そこには、永遠の栄光と望みがあります。今までの習慣がどうであろうと、取り巻きの人々がどうであろうと、「あなたは、わたしに従ってきなさい」(ヨハネ21・22)と言われる主の前に、たとえ一人であっても従っていくのです。これ

は、わたしがなすべき個人的な選択なのです。

三、きょうの決断

〈あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。〉私たちには、自分がしなければならぬ決断を伸ばして、状況に流されてしまう弱さがあります。しかし、きょう決断しないことは、流されることを決断してしまうことです。また、み心が示されていても、ロトのようにためらうことがあります(創世記19・15-16)。だからヨシユアは、(きょう)と言いました。神様もまた(きょう)と言われます。「きょう、み声を聞いたなら、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない」(ヘブル4・7)。良いことにおいて決心をする機会は、二度とないかもしれません。悪魔は耳元で「明日」とささやきますが、この機会を逃してはならない時があるのです。「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である」(Ⅱコリント6・2)。

結論

〈わたしとわたしの家とは共に主に仕えます〉と言ったヨシユアのごとく、自覚的な選択と決心をもって主を選び、主に仕えていくものとなりましょう。

研究資料

(金井由嗣)

ヨシユア記と戦争

ヨシユア記を含め、旧約聖書に見られる「聖戦」や「聖絶」の思想については慎重な取り扱いが必要である。本日
の箇所とは直接関係ないが、生徒から質問があった際には答えられるように準備をしておきたい。旧約聖書の戦争観についての専門的な研究書としては佐々木哲夫『旧約聖書と戦争』が、聖書全体の戦争観と平和観を学ぶには信州夏期講座編『キリスト者の平和論・戦争論』所収の岡山英雄論文「聖書神学的な平和論・戦争論」がお勧めである。以下の要点を押さえておきたい。①「聖戦」「聖絶」が命じられるときには明確な宗教的意味があり、主によって直接命じられている。②中心的な目的は「神の栄光を表すこと」と神の民イスラエルを偶像礼拝から切り離すことである。復讐や私益を目的とした戦争は固く禁じられている。③イエス・キリストの福音によって救われて神の民に加わる道がすべての人に開かれている。新約の時代には「聖戦」も「聖絶」もありえない。

文脈

23〜24章において、自分の死が近いことを意識したヨシユアはイスラエルの民全体に向けて別れの言葉を告げ、神への忠誠を保つよう勧める。この箇所の思想と表現は申命記とよく似ている。指導者の勧めを受けて民が契約を結ぶ点も同様である。23章ではヨシユアは個人的に民の指導者たちに語り、24章では主の代理人として公式に民に語り掛け、契約を結ぶ。

テキスト

14 それゆえ 2〜13節でヨシユアはアブラハムから出エジプト、カナン定着に至る歴史を回顧し、そのすべてが主の恵みによるものであったことを強調している。イスラエルが主に仕えることは、「それゆえ」恵みに対する当然の応答なのである。いま 過去においてイスラエルはしばしば主に背いてきた。その行き方から決別する意味で「今」決断が迫られる。あなたがたは主を恐れ：四つの命令文が連続している。「主を恐れなさい」「主に仕えなさい」「神々を除き去りなさい」「主に仕えなさい」。「仕える」〔ヘ〕アーバドは14〜15節で7回用いられている。

信仰とは観念ではなく、実際の行動において神に「仕える」ことであり、その行動は主を「恐れる」基本的態度から出てくる。主に仕えることとほかの神々に仕えることとは決して両立できない。**まことと、まごころと、真実とをもって** 原文では二つの文節であり、口語訳が三つに分けた理由は明白ではない。新改訳、新共同訳を参照。新改訳で「誠実」、新共同訳で「真心」と訳された言葉は〔ヘ〕ターミームで、普通は「完全」と訳される。この箇所では前置詞〔ヘ〕が付いた形で（内面と外面との対応において）「欠けることなく」の意味になる。「真実」は〔ヘ〕エメト。同じ前置詞がついた形で、言葉に表したことを実行する誠実さを意味する。主に仕える人には内面と外面、言葉と行動の一致における誠実さが求められる。

15 もしあなたがたが： 申命記と同じく、ここでは主に仕えることは民の選択にゆだねられている。真実な献身は強制によっては生まれない。神の恵みに対する主体的な応答が求められているのである。**あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、いまあなたがたの住む地のアモリびとの神々でも** 民数記25章にはモアブの神々への礼拝にイスラエルが加わった事例が記

されている。同様にカナン定着後にも先住民の偶像礼拝がイスラエルに入り込む危険は予期されていた。ただし、**わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。** 民に選択をゆだねたうえで、ヨシユア自身とその家族（子孫）とは主に仕え続けることを宣言する。主語「わたし」が強調されており、「他の人々がどうあってもわたしは」とのニュアンスで語られている。信仰を同じくするはずの仲間がこの世と妥協して信仰を曲げた場合、少数者となっても神への信仰を貫く人が真の信仰者である。

参考図書 R・S・ヘス（ティンデル）、M.H. Woudstra (New International Commentary)。

聖書

ヨシユア 24・14～15

タイトル

決めた！ 主よ、あなたに仕えます！

暗唱聖句

わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。
ヨシユア 24・15

目標

自覚的な選択と決心をもって神に仕える者となる。

導入

(和田 治)

冬休みに久しぶりにおばあちゃんちに行った時のことです……結実^{ゆみ}ちゃん「おばあちゃん、おいしいごちそうほんとにありがとう！ 後片付けは結実に任せて！」と、自分から進んで食器を洗いました。「結実ちゃん、ほんとにありがとねー！」おばあちゃんは、結実ちゃんが自分から進んで喜んでお手伝いしてくれたことが、とっても嬉しかったんです。同じことをするのも、「後片付けくらいやりなさい！」と言われて、いやいやながらやるのと、自分から後片付けをすることを選んで、進んでやるのとは、ずいぶん違うんですね。今日は、いやいやではなく喜んで、心から神様にお仕えすることを選んで人に注目です！

ヨシユアの最後のメッセージ

神様に従い続けてきたヨシユアは、百歳をとくに越え、自分の死ぬ日も近いと感じました。そして、大切な最後のメッセージをイスラエルの人々に伝えるために、皆を集めたのです。「皆さん、よく聞きなさい。主はこう仰います。『愛するイスラエルの民よ。わたしはあなたたちを、エジプトの苦しい奴隷の日々から救い出した。また、荒野の旅路もずっと食べ物を与えて導き続けた。ヨルダンを越えてエリコの城壁も打ち崩し、この地を征服させたのも、このわたしだ。あなたがたがおいしいぶどうやオリブの実を楽しむことが出来るようにしたのも、すべてわたしのだよ。わたしがあなたがたを愛しているからだ。どうかそのことを忘れず、わたしの愛に応えてほしい！』まったく仰るとおり、神様にどんなに感謝しても、足りないほどです。皆さん、今日、この神様にお仕えするか、それとも、神様を捨てて他の偽物の神々に仕えるのか、あなたがたが決めなさい。誰が何と言おうと、私と私の家族は、神様にお仕えます！」

神様に仕えることを選んでイスラエルの民

「ヨシユア様！ どうしてこの素晴らしい真の神様に

1月

25日 礼拝メッセージ例

背いて、他の神々になど仕えることが出来ましょうか・・・私たちは主なる神様にお仕えます！」

そうですね、神様からどれ程の愛をいただいたかを思えば、その愛に応えようとするのは当たり前のことですよね。でも、ヨシユアは、「皆が神様にお仕えないのに、自分と家族とだけでお仕えるのはやだな、皆はどうするかを聞いてから、神様にお仕えるかどうか決めるよう」と思ったわけではありません。自分から進んで、神様にお仕えることを選ぼうと決めたんです。その心を、神様はとってもお喜びになりました。

皆さんはどうですか？ 正直言って、教会学校の先生やお家の人に言われて、いやいや神様にお仕えしてきましたか？ お友だちやお家の人が教会に来るから、来ているだけで、自分で選んだわけじゃない？ たとえそうだとすると、今、改めて考えてみましょうよ・・・。

神様は私たちを愛して、食べ物も、この美しい世界も、そして私たち一人一人をも、造って下さいました。私たちがこうして生きることが出来るのは、ぜーくんぶ神様の恵みですよ！ そして、神様が与えて下さったなにより素晴らしい愛のプレゼント、それは、イエス様です！

大切なひとり子なのに、身代わりに十字架に付けて下さいました、私たちを救うために……。何という大きな愛！神様の愛を思えば、いやいやじゃなく心から進んで、喜んで、神様に仕えることを選べるのではないのでしょうか。

主に仕えるって？

「うん！ でもどうやって主になに仕えることになるのかな？」14節を読むと、ヨシユアは「主を恐れなさい」「他の神々を除き去りなさい」と命じていますよね。真心から主に仕えるとは、主を恐れること、つまり、罪を決して軽く見ないということです。そして、主なる神様以上に大切なものを一つも持たないということです。あなたにとって、神様は「一番」ですか？ 隠れたところで平気で罪を犯してはいないでしょうか？

決めた！ 主に仕えます！

ヨシユアのように、今、「決めた！ 主に仕えます。いやいやでなく、進んで、心からあなたにお仕えることを選びます！ 主なる神様、あなたが一番です！ 僕（私）の罪をお赦し下さい」って神様にはっきりお祈りしようではありませんか。その決心を神様は喜ばれますよ！

♪ウォーキング ウィズ ジーザス♪ (イン83)

聖書 マタイ18・1～5 テーマ 幼な子のように

序論

(中島啓一)

この世は優劣に基づく序列が幅を利かせます。そしてそんなこの世の価値観が、ともすれば教会の中にさえ入り込もうとします。しかし天国の前提である教会は、その侵入を許してはなりません。主イエスが弟子たちに教えられた、天国の価値観とはどのようなものでしょうか。

一、だれが偉いかを気にする弟子たち

弟子たちが主イエスに、「天国ではだれがいちばん偉いのですか」と尋ねましたが、彼らのこの議論に先がけて、主はご自身の死と復活を予告していました(17・22～23)。後に主が同様の予告をされた直後にも、ゼベダイの子たちが御国での特別な地位を求めます(20・17以下)。最後の晩餐の最中でさえ、相変わらず弟子たちはだれが偉いかで争論しているのです(ルカ22・24)。主がご自身の受難と復活について何度語っても、弟子たちの関心は自分たちの序列にしか向けられていませんでした。本来ならば、主イエスを十字架へと追いやる自分たちの罪深さに目を向けねばな

らなかつたにもかかわらずです。

これは、彼らだけの話ではありません。私たちもまた、私たちの罪のために贖いの犠牲となつてくださった主イエスの十字架の血潮の恵みを忘れるときに、教会は一致を失い、さばき合いや序列争いに終始してしまうのです。

二、幼な子のように自分を低くする

天国ではどちらが上か、などと競い合っている時点で、天国に入ることすらできません。そうならないために、主イエスは「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできない」と言われたのです。「心をいれかえて」とは、「悔い改めて、向きを変えて」と訳せる言葉です。優劣を競い合うこの世の価値観から、全く違うものへと方向転換しなくてはなりません。そしてそれは「幼な子のように」なることだと言うのです。

しばしば誤解されることですが、ここで主イエスは、幼な子の素直さ、無垢性などについて語っているのではなく、むしろ主イエスがここで無垢性(実際は、幼な子といえども神の前には罪人ですが)について語っているとしたら、その条件を満たして天国に入る人は一人もいないでしょう。そうではなく、主がここで語っているのは、子

どもの弱さや依存性についてです。当時のユダヤ社会では、幼な子はちっぽけで取るに足りないものたえに用いられました。もちろん幼な子をそのように見なしていたのは当時の人々であって、主イエスにとっては幼な子も価値ある存在です。だからこそ主は彼らを「まん中に立たせ」て光を当てられました。そして弟子たちに対し、「幼な子を取るに足りない者とみなすあなたがたは、自分を一端の者であるかのように考えているが、天国に入るためには、自分自身こそ取るに足りない者であることに気づかなくてはならない」と教えられたのです。神の前では、人と比べての自分の優劣など全く虚しいものです。必要なことは、そんな自分の弱さ、罪深さを潔く認め、神のあわれみにすぎることなのです。

〈自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである〉。このように天国の価値観は、優劣を競うこの世のそれとは正反対です。天国は、「上下逆さまの国」(Up-side-down Kingdom)と言われます。自分がそこに入るのにふさわしいと考えている人は決してそこに入ることはできず、逆に、自分はそのに全くふさわしくない罪深い者であることを認め、けれども神様からの贈り物としてそれを受け入れ

る人だけが、そこに入ることができる国なのです。

三、幼な子をイエスの名のゆえに受けいれる

続いて主イエスは、最も無価値である大人たちが考える幼な子を、「わたしの名のゆえに受けいれる」ように命じておられます。もちろんその真意は、幼な子だけでなく「全ての人を」です。そしてそれは「わたしを受けいれる」とだと主はおっしゃるのです。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」(25・40)とあるとおりです。「キリストは彼のためにも、死なれたのである」(ローマ14・15)。この事実こそが、私たちを高ぶりの危険から遠ざけ、天国の価値観に基づいて互いに愛し合い、仕え合うことを実現させる力の源泉です。罪深い私のために、キリストは十字架で命を捨てて下さいました。そのお方が目の前のこの人のことも愛しておられるのです。

結論

幼な子とはまさに私たち自身であり、そして目の前の隣り人です。限らない恵みによって主に受け入れられていることを感謝しつつ、互いに愛し合い、仕え合うなら、教会は地上にあっても天国を表すものとされるのです。

研究資料

(宮澤清志)

今週より、新しい単元「キリストの教え」にはいる。マタイは、彼の書いた福音書の中で、イエスのおしえ(説教)を5つの箇所にとまとめている(5〜7章/10章/13章/18章/24〜25章)。

この箇所は、そのうちの4番目の説教である(この説教の始まりをどこにおくかは注解者によって多少の相違がある。ある注解者は第4の説教の始まりを17・24に見る)。イエスはこの箇所で、ご自身が建てられた教会の倫理観を示される。教会は、単に同心の者が便宜上構成する組織ではなく、イエスによって建てられた(16・18)ものであり、「天の御国」の地上的な現れともいえる場所である。しかし、残念なことに、彼らは完全ではない。罪や弱さを持ち、プライドや不信仰の中にいる。結果、様々な問題を引き起こし、あるいは巻き込まれてしまう。そのような事態に直面したときに、神の民はどのようなふるまうべきであろうか。この箇所はそのような問題に対する示唆を与える箇所である。

なお、本箇所は、並行記事としてマルコ9・33〜37、

ルカ9・46〜48にも記載されており、当該箇所にも目を通して備えていただきたい。

テキスト

1 弟子たちが 他の並行箇所との相違点の一つ。他の福音書では、弟子たちが論じ合っていたところにイエスがやってきたとされている。しかしマタイによれば、弟子たちの方からイエスに近づいて質問したとされている。天国ではだれがいちばん偉いのですか この箇所も他の福音書との相違のある箇所である。特にマルコでは、弟子たちの間で誰が一番偉いかという現在の序列についての論争であるのに対して、マタイでは弟子の間の順位ではなく「天国」では誰が一番偉いかという問いかけになっている。また、「誰が^{だれ}一番偉いか」というテーマは、この後更に20・20〜28にも繰り返される。この問いは、イエスの三度目の受難予告(20・17〜19)の後に起こっている。本日のテキストの前にも二度目の受難予告がある(17・22〜23)。このように考えると、当時の弟子たちにとっての関心事は、イエスの受難よりも優劣争いであつたという弟子たちの弱さが反映されている。

2〜3 幼な子 おそらく近くで遊んでいた小さな子で

あろう。心をいれかえて 新改訳では「悔い改めて」と訳している。同時に新改訳の欄外注には「向きを変えて」という直訳を載せている。方向転換を指す言葉である。それまでの「誰が一番偉いか」という偉さを求めるあり方から向きを変えて、幼子のようになることを求めたものである。具体的には次節のイエスの言葉にその真意がある。**幼な子のように** 多くの注解者が、幼子の具体的な特性を挙げている。たとえば、誰かに頼らなければ自分だけでは生きていけない、誰かの保護を必要とする、というような特性が挙げられよう。しかし、ここで最も言わんとするところは、幼子の社会的立場のゆえである。幼子は社会的立場を持たず、また自ら求めることをせず、自らの無力さを知っている存在である。権力や財力、地位とは無関係に生きる存在の代表として、イエスは幼子を取り上げたのであろう。**天国にはいることはできない** イエスは弟子たちの「誰が一番偉いか」という問いから出発して、天国にはいるための条件という、神の民のさらに本質的な問いを弟子たちに示している。

4 この記事はマタイ独自の記事であり、マルコとルカにはこの記述はない。ここに、当初弟子たちが問うた「天

国では誰が一番偉いか」(1) という問いの答えがある。それは「自分を低くする者」すなわち謙遜さである。大人の世界は、年功序列、政治的手腕、経済的資本、軍事などによって格付けがなされる世界である。それに対して子どもの本質は、弱く小さい者であり、助けを必要とする存在である。低さ、謙遜さこそが、天の御国において問われることなのである。それは、ちょうどイエスがご自身のことを「へりくだっている」と語られた言葉と同じである(11・29)。

5 この節は前節までの結論であると同時に6節以降に続くものと理解できる。**このようなひとりの幼な子** 前節までの、大人に対する子どもではなく、イエスの弟子たちを指す。**わたしの名のゆえに** イエスの弟子たちは、幼子のように小さくつまらない者である。しかし、彼らはイエスのもの(所有)であるがゆえに、彼ら(イエスの弟子たち)を受け入れる者はイエスご自身を受け入れる者なのである。**受けいれる** 引き受ける、認める、歓迎するなどの意味を持つ。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解』(いのちのこ
とば社)、他

聖書

マタイ18・1〜5

タイトル

幼な子のように

暗唱聖句

心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。
マタイ18・3

目標

幼な子のようにへりくだった心で生きる。

導入

(和田 治)

みなさん、今日からしばらく、イエス様が弟子たちに語られたメッセージと一緒に見ていきますよ。私たちにとってすごく大切なこと、そして、「えっ？」と驚くようなことが次々出てきます……。楽しみ楽しみ！

誰が一番？

「分かってると思うけど、一応言っとくね。われわれ弟子の中で一番偉いのは、やっぱり僕だね。」「ちよつとちよつと、忘れてもらっちゃ困るよ、それならこの僕でしょ？」「いやいや、君たちよりは僕の方がよっぽど偉いさ！」「なんだって！」「わいわいがやがや：。」「よくし、それならイエス様にお尋ねしてみようじゃないか！」「そういうわけで、弟子たちはイエス様に尋ねました。「私たち

のうち、誰が天国で一番偉いのでしょうか？」

え？ 小さい子どもが一番？

するとイエス様は、近くにいた小さい子ども（幼な子）を呼び寄せ、皆の真ん中に立たせてから仰いました。「よく聞きなさい。心をいれかえて、神様のもとに帰り、この幼な子のようにならなければ、決して天国には入れません。幼な子のように自分を低くする者が、天国では一番偉いのですよ」。え？ 自分を低くする？ もちろん背の高さのことじゃありません。「幼な子を、取るに足りない、どうでもよい者と思っているあなたがたは、自分こそ偉いと考えていますね。でも、天国に入るためには、自分こそ取るに足りない者であることに気づかなくてはならないのですよ」と教えられたのです。

みなさんは、「僕は偉いんだぜ。だって、〇〇〇ができるからね！」「私こそ一番よ。だって〇〇〇なんですから！」って考えていませんか？ 幼な子なんか比べものにならないよ！って…。でも、神様の前では、人と比べて自慢し、人を見下げる心は、罪深い心、天国にふさわしくない心なんです。イエス様が仰ったように、天国は自分を低くする者が一番の国、つまり「上下逆さまの国」なんです。

2月

1日 礼拝メッセージ例

自分は天国にふさわしくない罪深い者だと認め、神様からのプレゼントとして「ありがとう！」と天国への切符を受け取る人だけが、そこに入れるんです！

心を映す大型テレビ？

今ここに大画面のテレビがあるとしましょう。ピッとスイッチを押すと、あら不思議！「あれれれ？これは、僕が今までで考えてきたことじゃないか？」もしそんなことが起こったら、あなたはどうしますか？お友だちや先生たちと一緒に見ながら、「じゃーん！どんなもんだい！」って自慢できるかな？先生なら「やっ、やめてくださーい！」って、テレビのコンセントを抜いちやうかも。私たちはみんな、たとえ行いが正しくても、心の中には意地悪や自慢する心や人を馬鹿にする気持ちが少しはあるんじゃないでしょうか。心の中は見えないけれど、それがもし全部見れたなら、やっぱり困りますよね。ってことは、「僕が一番！」「私こそ偉いのよ！」って言えませんか。そんな僕たち私たちの汚い罪の罰を身代わりに受けて下さったお方、それがイエス様です！

心をいれかえた弟子たち

実は、誰が^{だれ}一番偉いかっていう言い争いを、ちよくちよ

くしていた弟子たちは、ある時からピタッとしなくなりました。それは、十字架で死なれて、よみがえられたイエス様に、お会いしてからです。イエス様が十字架に付けられる前に捕まえられたとき、弟子たちはみんな怖くなつて逃げ出してしまいました。「あなたのためなら、命も捨てます！」ってみんな言ってたのに・・・！でも、復活なさったイエス様は、そんな弟子たちを愛して、赦^{ゆる}して、もう一度用いようとしてくださいました。弟子たちは、イエス様の十字架の苦しみが自分の罪のためだとはっきり分かり、ごめんなさいとおわびし、心を入れかえたのです。小さな子どものように、自慢せず、ただ天のお父さまにお頼りする心が与えられました。それから、皆で心を一つにして福音を宣べ伝えました。

まとめ

イエス様は仰いましたね。「このような小さな子どもをわたしのために受け入れる者は、わたしを受け入れるのです」って。自分を低くして、イエス様に喜ばれるお心で、周りのお友だちを大切に、一緒に天国に向かってまっすぐに歩んでいきましょう！

♪わたしのよに♪（イン75、ホ98）

聖書 マタイ18・12・14 テーマ 迷子の羊

序論

(石田高保)

この説話はそもそも、弟子たちが「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」とイエス様に質問したところから始まっている(18・1)。その答えは彼らのうち誰も想像さえしなかったものであった。それは「幼な子のように」自分を低くする者だったからである(3)。弟子たちはあまりに意外な答えに面食らった。天国、つまり神の国の価値観に慣れていなかったのである。弟子たちといえどもこの頃はまだまだこの世の価値観から抜け切れてはいなかった。「なぜ幼な子なのだ? 取るに足りないではないか。イエス様のおっしゃることはますますわからん!」と首をひねったことだろう。さらに次の言葉が追い打ちをかける。「わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまづかせる者は……」(6)。このあまりに過激な表現に血は凍り、彼らの世界観にひびが入ったであろう。そこまで主が言われる理由は何だろうか。

一、この世がひとりを軽んじるから

それは一般的に〈小さい者〉つまり子どもや弱い立場の人を軽んじる傾向があるからである。「あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい」と言われている(10)。その理由は11節にあるように、小さい者のひとりびとりは天の父に顧みられ、守られている大切な存在だからである。イエス様にとってはそのような人もかけがえのない人間である。地球上に70億人いるからといって、あなたは神の前には70億分の1なのではない。神はあなたを1分の1として計算し、他の人は目に入らないかのように、ご自分にとつての全てであるかのように入らなさにしておられる。あなた一人が欠けてもこの世界が成り立たないかのようにご覧になっている。あたかもどこかに紛れ込んだジグソーパズルの一片を追いかめるかのよう。あるいは落としたコンタクトレンズを懸命に捜すかのよう。これは私たちに対して隣人をそのように見よとのチャレンジとして受け取れないであろうか。

ここでイエス様は〈小さい者〉を1匹の羊になぞらえている。これは幼な子のことだけでなく、罪人や取税人、遊女といった普通の人からつまはじきにされている人々のこ

とも指している。羊飼いというものは、百匹のうち1匹でもいなくなったら、草の根をかき分けても捜すものである。1匹くらいいなくなっても構わないとは決して思わない。雇人であれば1匹分を弁償しなければならぬ。しかしだからといって1匹の羊がいなくなったからというので、残りの99匹を山に残しておいて捜しに行くなど現実的とは思えない。これは羊の群れを誰にも任せず放っておくという意味だから、そんなことをすれば99匹の羊までが迷い出てしまい、野獣の餌食になるかもしれない。むしろ99匹のほうを大事にしたほうが得策だと考えるだろう。それにもかかわらず当時の羊飼いはそういうリスクを覚悟してまでも1匹の羊を捜し求めるものであった。あたかも1匹イコール99匹であるかのように。これは常識では成り立たない計算である。(その迷い出ている羊を捜しに出かけないであろうか)と言って、主は聴衆の心に訴えている。

二、この世が神から離れているから

後半は、かけがえないものを見つけた喜びについてである。(もしそれを見つけたなら：迷わないでいる九十九匹のためよりも、むしろその一匹のために喜ぶであろう)、ここにもこの世の計算とはずいぶん違う価値判断がなされ

ている。いなくなっていた1匹を見つけることは、99匹を失わなかったことよりも大きな喜びだと言っている。この場合99匹とは、自分には悔い改めは必要なく、まともな人間だと自任している人を指し、いなくなっていた1匹とは自分を罪人と認め、悔い改めた人のことを指している。どちらが神様に喜ばれるのかと言えば後者であるのは疑いようがない。罪の否認と自己義認こそは神へのあからさまな対抗であるがゆえに罪の中の罪である。「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔い改めを必要としない九十九人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう」(ルカ15・7)とあるように、神にとってはその人の過去がどうであつたかよりも、現在、神のもとに立ち返っているかどうかが大きき関心事である。過去を問うのではなく、現在の神への態度を問うておられる。

結論

神の国では幼な子がいちばん偉いという世界観を獲得することができようか。目の前の人を神が目に入れても痛くない存在としてご覧になっていることを受け入れられるだろうか。日常的に迫るメッセージである。

研究資料

(宮澤清志)

この箇所は、いわゆる「迷い出た羊のたとえ」といわれるたとえ話が登場する。

しかし、様々な注解書を見ると、その枠組みはここだけが単独で取り上げられるのではなく、10～14節として取り上げられるのが一般的である。ここには「小さい者に対する配慮」という題を付けることができよう。6～9節で、イエスは「これらの小さい者」(6)をつまずかせぬよう警告を発する。同時にここでも「これらの小さい者」(14)に対する取り扱いを語る。

なお、このたとえ話の並行記事はルカ15・3～7にある。説教のための備えに当たっては、後述するようにこの箇所との相違を思いめぐらすことも有益であろう。同時に「牧者と羊」の関係が語られているエゼキエル34章やヨハネ10章にも目を通すことによって、このたとえがより立体的に理解できると思われる。

テキスト

12 あなたがたはどう思うか 比喩によって誘導尋問を行うユダヤのすぐれた教育法の一つである。あるいは、

ある問題について深く考えさせようとするときにイエスがしばしば用いた言葉(22・17、42など)。ここで登場する「あなたがた」とは誰であろうか。ここでイエスが語っておられる対象は「弟子たち」(1)であり、弟子一般に對してこのたとえが語られる。一方並行記事であるルカには「パリサイ人や律法学者」(ルカ15・2)とあり、同じたとえであってもその聴衆が異なることがわかる。すなわちルカでは、パリサイ人や律法学者たちに対して、取税人や罪人に対する神の愛を語り、今日のマタイの箇所では弟子たちに、自らの教会共同体に属する兄弟への愛を求めているのである。山 ルカの文脈では「野原」となっている。マタイにとって「山」とは特別な意味を持つ。マタイにおいて、山とはイエスが集中的に教える語る場所であり(5・1)、イエスの神性が明確に示される場であり(17・1)、復活の主が弟子たちに宣教の使命を与える場である(28・16)。このことを考えると、山において九十九匹が残されている場面とは、教会が暗示されているとみることもできる。迷い出ている 正しい道からそれる、誤った方向に向かう、という意。この語は惑わしによる信仰の挫折を意味する言葉として用いられ

ている。マタイにとって、この言葉は「背教」と関連する、重要な言葉である。マタイの別の箇所では「惑わす」(24・4、5、11、24)と訳されている。探しに出かけないであろうか 字義訳は「進みながら捜す」。必死になって探し回る様子を描いている。同時に「捜す」行為が熱心に継続された様子が示唆されている。

13 よく聞きなさい イエスが重要な明言をするときにしばしば用いられる常套句(3)。迷わないでいる パレスチナでは、羊飼いが自分の羊の群れを置き去りにするということは、自明のことではないのである。たとえば、ダビデの兄エリアブはダビデに、羊の群れを誰に託してきたかを尋ねている(サムエル上17・28)。このたとえの背後には、この羊たちは決して迷い出ることはない、という含みがある。羊飼いは、残された九十九匹の羊に對して絶対的な信頼を持っていたことが含意されている。

14 このように この節は、12・13節までに見られるたとえの総括としての意味を持っている。これらの小さい者のひとり この言葉が本章に最初に登場するのは6節であり、この言葉を理解することは、本章前半を解くカ

ギとなつてゐる。同時にこの言葉は10節にもみられるものであり、この言葉がこの段落の最初と最後に括弧のように登場することからも、今回の箇所を理解するためにはこの言葉を正しく理解する必要があることを物語る。減びること つまずきが起ることは避けられない(7)。迷い出る小さな者たちは必ず出る。しかし、その一人でも減びることは神の御心ではないのである。神の前には、一人ひとはかけがえない存在なのである(エゼキエル33・11)。

前述のように、この箇所は「これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい」(10)から始まったたとえ話である。イエスはこのたとえ話を通して、神がひとりの御国の民を限りなく愛される愛の方であり、どの一人をも減びるのを望んでおられないお方であることを明らかにする。一匹の羊は、神にとってはそれほど価値のあるものである。同時に人間を救われる神のイニシアチブも語られている。そうであれば、私たちはなおさらお互いを愛し慈しむ姿勢が求められるのではないだろうか。

参考図書 2月1日分と同じ。

聖書

マタイ18・12～14

タイトル
暗唱聖句

捜し出すよ！ 迷える一人を・・・
もしそれを見つけたなら・・・迷わない
でいる九十九匹のためよりも、むしろそ
の一匹のために喜ぶであらう。

目 標

一人を追いかけて救おうとされる神の御
心を知って生きる。

マタイ18・13

導入

(和田 治)

「ピーンポーンポーンポーン……。ご来店中のお客様に迷子のお知らせをいたします。△と●の洋服をお召しになった三歳くらいのお子様がサービスカウンターでお連れ様をお待ちです。お心当たりの方は二階サービスカウンターへお越しくださいませ」。こんな放送、結構聞きますよね！でも、お店の中じゃなくて、広いひろ～い野原で羊が迷子になっちゃったら、放送もできません。助かるには、羊飼いに見つけてもらうしかありません！今日は、迷子の一匹の羊と、その羊飼いのお話ですよ。

なんとしても、一匹を・・・！

イエス様は仰いました。「ある人が百匹の羊を持っていたとします。そのうちの一匹が迷い出ていなくなったら、その人はどうするでしょう。ほかの九十九匹はその場に残したまま、いなくなった一匹を捜しに、山へ出かけるでしょう」。そうなんです！「一匹くらいいいや。他に九十九匹も残ってるし、めんどくさいし、…このままにしておこつと」な～んていうことは絶対の絶対ではありません！ 続いてイエス様が仰います。「そして、もし見つけたら、ほかの九十九匹以上に、この一匹のために大喜びするのです。同じように、わたしの父も、この小さい者たちの一人でも滅びないようにと願っておられるのです」。良かった、天のお父さまはこの羊飼いのように、一匹の羊のような取るに足りない小さな人間一人一人を、なんとしても見つけなければ！ って大切に思ってくださっているんですね。だから、その羊を探すために、羊飼�としてイエス様をこの世界に送って下さったんです。イエス様はまさしく、この優しい羊飼�のようなお方なんです。

私たちもみんな、迷い出た羊のようでした。どうやったら天国に行けるのか、どうしたら本当に幸せになれるのか、

全くわからないで、そのままだったら滅びるほかない真つ暗闇の人生でした。でも、イエス様が良い羊飼いいとして、命を懸けて私たちを見つけ出し、救ってくださったんです！ ありがたい、優しい羊飼いのイエス様！

私たちも羊飼いですか？

それだけじゃありません。イエス様のこのたとえ話は、さらに深い意味があるんです。実は、イエス様は私たちに、この羊飼いのように一生懸命、迷い出た羊を捜してほしうって思ってたんじゃないんです。あなたの周りには、イエス様のことを知らない家族やお友だちがいますか？ そのひとり一人は、まさに迷い出た羊のようなんです。自分が迷っていることにすら気づかずに、もちろん、どこに帰ったら良いかも全くわからず、滅びに向かっていく迷える羊…。「どうせ、聞いてくれないもん！」「一度教会に誘ってみたけど、断られちゃったし」。「迷っているって言っても、結構幸せそうだし」。いえいえ！ 天のお父さまは、そのひとり一人がご自身のもとに帰ってくるのを待っておられるんです。どんなことをしても救いたいと強く願っておられるんです。そのお心を思うと、その一匹をほしたらかしにはできませんよね。

もともと仲間だから・・・

もう一つ、大切なメッセージがあります。この迷子になった羊のことを考えてみましょう。もともとこの羊は他の九十九匹と一緒に暮らしていたんですね。皆さんの周りにも、この教会学校と一緒に来ていたのに、いつのまにかいなくなっちゃったお友だち、いろんな事情で来れなくなっちゃったお友だち、迷い出てしまっているお友だちがいませんか？ もし、皆さんがそのようなお友だちのことを、すっかり忘れてしまつて、お祈りもしないし声もかけないとしたら、それは、迷子になった羊を捜そうともせず、気にしないでほつたらかしにしている悪い羊飼いに似てるかも…。今、迷い出てしまったお友だちのために祈りませんか？ そして、何ができるかを考えてみましょうよ。もしその羊を必死に捜し求める羊飼いのように、あなたのできる精一杯をするなら、天のお父さまはとっても喜ばれますよ！

まとめ

今日の暗証聖句のように、その一匹のために喜ばれる神様の喜びに、わたしたちも満たされましょう！

♪ ちいさいひつじが ♪ (こ72、こ改55、新聖歌485)

聖書 マタイ18・21～35 テーマ 七たびを七十倍するまで

序論

(石田高保)

イエス様を信じて生まれ変わった人は、救って下さったイエス様に生涯、仕えて行きたいと願うものである。主のように隣人に仕えてゆきたいと願う、これはクリスチャンの本能と言ってよい。そしてイエス様の言うしもべの在り方である。「あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕のとならねばならない」(マルコ10・44)。では、イエス様に仕え、隣人に仕えるというしもべの特徴は何か。それは豊かに赦す者である。

一、赦しの土台

私たちが他の人を赦せるとするならば、それは神がまず、私たちを赦してくださったからである。神から赦されていることを腹の底から体験しないうちは、どんなに菌を食いしばっても他の人を本気で赦すことはできないだろう。なぜなら私たちの本性は赦しではなく、仕返しだから。人から言われたことに言い返すことや、されたことに仕返しをするときには、なんの努力も忍耐力も要しない。人間の罪

深い性質から自由に流れ出る悪である。リベンジという英語がすっかり日本語として定着してしまったほどである。カッコいい響きであるが、要は仕返し、復讐、仇討ちという意味である。人間性は原罪によって歪められているから、放っておいたら社会も歴史もリベンジで溢れ返ってしまふ。そんな復讐の洪水の中で、本気で他の人を赦して行くためには、どうしても神の恵みが必要である。神から赦されていることを体験しなければならない。

私たちの犯した罪が、イエス様によって十字架で贖われた時、神の裁きは私たちの身代わりとなられたイエス様の下された。神はその完全ないけにえに免じて、御子を受け入れる者すべてを、赦してください。何の罪滅ぼしも、償いも、善行努力も要らなかった。ただ自分の罪を悔い改め、イエス様を受け入れただけであつた。「罪の支払う報酬は死」だから、死んでお詫びをするほかはない罪という借金、イエス様は十字架にかかることによって、私たちの代わりに支払って下さった。罪という多重債務ですっかり首が回らなくなったところを、イエス様は肩代わりして下さった。借金地獄から解放され、大手を振って歩ける身に変えられた。しもべが王様から一万タラントの負債を免じ

られたということである（一万タラントは六千億円に相当する）。

二、赦しの方法

赦しについての聖書の原則は、エペソ4・32「互いに情け深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあつてあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互いにゆるし合いなさい」である。赦すことはクリスチャン・ライフのオプション・選択科目ではなく、必修科目ということである。

〈主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか〉、この当時の決まりでは、赦しの限度は3回であつた（まさに仏の顔も三度まで）。ペテロはその限度を倍以上にはずんで「七たびまでですか」と質問している。彼の思いでは七たびも赦せば十分で、それを越えたら赦さなくてもいいと考えていたことだろう。それに対してイエス様の言われたことは（22）、無限に赦しなさいということであつた。それに續くたとえ話では、六千億円という莫大な借金には無限の赦しが必要だったが、王様はその男を赦し、借金を棒引きしてあげた。信じられないほどの寛容さに圧倒され、呆然とした

はずである。ところがそのすぐ後で、この男は百万円ほど自分に借金をしている人を赦さないで、監獄に入れてしまったというのである。

赦さないことで、自分を守れると考える人もいるが、これは大きな勘違いで、かえって自分の身を蝕むことになる。人を赦さないでいると恨みと憎しみによって自分が苦しみ、平安を失ってしまふ。赦さないという種を蒔けば、断絶という実を刈り取るのである。しかし赦すという種を蒔けば、和解と平和という実を刈り取ることができる。

結論

では、具体的な赦しの方法は次のとおりである。

①認識。誰について、何を赦さないでいるかを明確にする。②悔い改め。イエス様によって神から赦されているにもかかわらず、人を赦さないでいたことを悔い改める。赦さないことでリベンジする権利を握っていたことを悔い改める。血潮による罪の赦しを確信する。③傷つけた人を祝福する祈りをする。④赦し続けるといふ生き方を選択する。聖霊の導きによって和解する。

イエス様に仕えるしもべは豊かに赦す者である。

研究資料

(宮澤清志)

先々週から始まった「キリストの教え」の第三回は、他人の罪を赦すことに関するイエスの教えである。15〜20節において、イエスは、罪を犯した信仰者に対する対処を語る。しかし、そのような対処以前の問題として、赦しの限界をどこに設けるのか、とペテロは問う。

テキスト

21 そのとき マタイにおいては、新しい話しをはじめための導入の言葉となっている。兄弟 ここでは肉親の兄弟ではなく霊の兄弟、すなわち神の家族であるキリスト者を指す。幾たび この言葉には、イエスから教えられているように、赦すには赦すが限界がある、という思いが言外に含まれている。七たび この数は、質問者であるペテロが赦すことのできる最大限の数字だったのであろう。ユダヤ教においては、赦されることのできるのは3回までであった。

22 七たびを七十倍するまで 何も、この言葉は字義どおりに490回赦すという意味ではない。イエスがここで言わんとすることは「無限に」という意味である。罪を犯した人

に対しては、制限を設けるべきではない。なぜならば、神の愛は無限だからである。しかし、無限に赦すことと、罪を不問にすることは異なる(15〜20参照)。

23〜27 イエスは前2節の意味を補強するものとして、ひとつのたとえを語られる。一万タラント(24) 1タラントは六千デナリ。1デナリは労働者一日分の賃金。わかり易くするように、労働者の日給を1万円とすると、六千億円。しかし、あまりピンとこないもので、当時の王と比較すると、ガリラヤとペレヤの王ヘロデ・アンテパスの年収は200タラント、アケラオの年収は600タラント。また権勢を誇ったソロモン王は666タラントだったといわれている(列王上10・14)。あわれに思って(27) はらわた痛むほどの感情を表す言葉。ゆるし(27) 「解放する」「自由にする」という意。負債を免じてやった(27) ここでは「取り消す」「帳消しにする」などの意味である。王は、猶予するという選択肢ではなく負債そのものがないものと認めたのである。

これらのことから考えて、このたとえ話の真の意味は何であろうか。まず、一万タラントという負債の額は、いうまでもなく人が一生かかっても返すことができないほどの

大きな負債である。このような誇張とも思えるたとえによって、イエスは、人間の持つている一生かかってでも返すことができないほどの罪の大きさを語っている。同時にそのような大きな負債を無条件に免除した王にも注目したい。王なる神の支配とは、ここで示されるほどに深い憐みの支配であるということがはっきりと示されている。また、**決算が始まる**と(24) とあるように、決算が始まるまで自らの負債のあることに気づかない僕の姿は、罪の中にありながらもその罪に気付かない自らの姿そのものである。

28〜34 一方負債を免除された僕は、100デナリを貸している仲間を赦すことができなかった。100デナリそれ自体は、労働者100日分の賃金であることを考えると確かに高額である。しかし、この僕の負債である一万タラントから考えるとわずか60万分の1である。**出会**い(28) とは、むしろ「見つけ」とも訳すべき言葉で、偶然見つけたというイメージよりは、むしろ捜して見つけ出した、というイメージである。また赦された僕がとった行動も常軌を逸している。まず、**彼をつかまえ**(28) とは、羽交い絞めにするという意味の言葉である。また、**首をしめて**(28) とは、窒息さ

せる、あるいは息を止めてものを言えなくするという非常に強い言葉が用いられている。あれだけの負債を免除された人物とは思えない取り扱いである。最後には、赦された僕は仲間を **獄に入れた**(30)。この言葉の直訳は「放り投げた」である。

この様子を見ていた彼の僕仲間、事の詳細を主人に説明した(31)。この僕のとった態度は、主人の怒りを引き起こした(34)。そしてこの僕を **悪い僕**(32) と呼んで断罪した。一万タラントの負債をつくった時でさえ、この主人は僕をこのようには呼ばなかった。

仲間の負債を赦すことのできないこの僕の中に、友の罪を赦すことのできない人間の姿が示される。

35 前節までで、イエスによるたとえ話は終わった。この箇所はこれまでのたとえ話の適用である。人間が神に対して負っている負債(罪)に比べれば、人間同士の負債(罪)は比べることもできないほどのものである。私たちの創造者である神が私たちを赦してくださったのであれば、私たちも、互いに、しかも無制限、無条件に赦さなければならぬ。

参考図書 2月1日分と同じ。

聖書

マタイ18・21～35

タイトル

赦しの恵み

わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい。

マタイ18・22

目標

神の無限の赦しを覚え、人を赦す者となる。

導入

(飯田勝彦)

「みんなと仲良くしましょう。」とよく言われるでしょう。でも、みんなの友だちの中で仲が悪い人っていないか？ いつも喧嘩し合っている人。いつも友だちの悪口を言っている人。お互いに責め合い、赦し合えないと辛いですね。赦されることは慰めですが、赦すこともすばらしい恵みと知りましょう。

赦される恵みを体験できなかった僕

ある時、ペテロが「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、何回まで赦さなければいけませんか。7回までですか？」と尋ねました。イエス様は「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい」と答えられました。そして、天国を王と僕たちと

の決算に例えて話をされました。王のもとに王から一万タラントの借金をしている僕が連れて来られました。主人である王は、僕に「お前の妻子や全財産を売ってでもして、借金を返せ！」と命じました。一万タラントの借金とは今で言えば、六千億円ほどに相当するものでした。僕は押しつぶされそうな借金を目の前にして王の前にひれ伏し「どうぞお待ちください。全部お返ししますから！」と必死になって願いました。すると、王は僕をわれに思い、膨大な借金をすべて帳消しにしてやったのです。

しかし、その僕は自分から百タラント(約百万円相当)を借りている人を、借金を返すまで獄に入れたのです。この僕はどうして、王から赦されたように自分から借金をしている人を赦すことが出来なかったのでしょうか？ この僕は、自分の借金が帳消しにされたことを恵みとして体験することができなかったのではないのでしょうか。彼は王のあわれみを、心から感謝するところか、ただ「赦されてラッキー、得した！」としか受け止められなかったのです。

赦され、赦す恵みを体験しよう！

2月

15日 礼拝メッセージ例

もし、みんながこの僕なら王から赦されたことをどのように思いますか? 「やった! これで何も心配なくとも良いや。バンザーイ!」で終わりますか?

もし、赦されたことを大きな恵みとして体験したなら、赦してくれた王に精一杯の感謝をするでしょう。そして、赦された恵みを嘯みしめながら、その恵みに生かされて行くのではないでしょうか? 赦された恵みを体験してすぐに、あわれみが必要な者を牢獄に入れるようなことができるでしょうか?

人を赦すことができるのは、赦された恵みを体験している人です。みんなは「赦された」という体験がありますか? 赦しの体験をさせてくださる方は、私たちの救い主イエス・キリストです。

私たちは罪という負債を背負わされています。それは、一億円よりも重くて大きいのです。それを背負い続けること一生苦しみの中を歩かなければならないどころか、永遠の滅びへと向かってしまいます。でも、王であるイエス・キリストは、私たちを罪から解放するために、十字架でご自分の命を投げ出し、私たちの罪の負債を赦してくださいました。このイエス・キリストの十字架

を自分のものとして信じ受け取る時、キリストの救いの溢れる恵みを体験することができます。

赦しを体験している者は、イエス・キリストに感謝すると同時に、イエス・キリストを慕う者にされます。そして、体験した恵みを隣人に実践できるようにされます。それは、他者を赦す形であらわれます。

誰かを赦さないことで苦しむのは、実は自分なのです。いつまでも怒りや憎しみを持ち続けることは、心が赦せない相手に縛られていることになります。相手を赦すことができて初めて、心が楽になります。赦されることを嫌がる人はいません。本当の赦しを体験できた人の心は平安になります。ですから、赦すことは損することではなく、自分にとっても相手にとっても大きな恵みなのです。

まとめ

イエス様に赦された恵みで、隣人を赦す恵みを体験させていだけましょう。

♪ゆるすためです♪ (ホ58、イン25)

聖書 マタイ20・20～28 テーマ 仕える生き方

序論

(金井 望)

神の僕として仕えるために来臨された主イエスのお姿を学びたい。

イエスは山上で、弟子たちに天上の栄光をお見せにされた。それからすぐに主は彼らを連れて山を降りて行かれた。山麓に広がる世界は悪霊が暗躍し、民族、家柄、地位、権力、武力、財力、体力、知力、年齢、性別といった諸条件において、持てる者が持たざる者を支配する冷酷な階級社会である。その現実のただ中に神の御子イエスは降つて来られ、自ら新しい人間の生き方を示されたのである。今日もイエスを見つめ、御声を聴こう。

一、成り上りを志向する弟子たち

イエスが3度目の受難予告をされた（そのとき、ゼベダイの子らの母が、その子らと一緒にイエスのもとにきてひざまずき、何事かを願った。：彼女は言った、「わたしのこのふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはあるの右に、ひとりは左にすわれるように、お言

葉をください」。ゼベダイの子らとはヤコブとヨハネである（4・21）。彼らはイエスの山上の変貌を目撃し、受難の予告を聴いて、イエスがまもなく王として君臨されるのだと思った。その話を聞いた彼らの母は、師であるイエスに息子たちの出世を頼み込んだのである。

「イエスは答えて言われた、「あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかっていない。わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか」。イエスが飲まれる「杯」とは十字架刑のことである。これからイエスは、神に背いてきた人類すべてが飲むべき神の憤りの「杯」（26・39、詩篇11・6、イザヤ51・17）を代わりに飲み干される。

イエスの問いに「彼らは「できます」と答えた。イエスは彼らに言われた、「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、わたしの父によって備えられている人々だけに許されることである」。ヤコブは後に12使徒の中で最初の殉教者となり（使徒12・2）、ヨハネも迫害を受け、晩年にはパトモス島に流刑とされた（使徒4・3、黙示録1・9）。

〈十人の者はこれを聞いて、このふたりの兄弟たちのことで憤慨した〉。他の弟子たちも、実は彼らと同様の成り上がり志向を持っていた。確かに主イエスは12使徒に特別な地位を約束しておられる(ルカ22・30)。ただし、そのために彼らはこの後、多くの試練を経なければならぬ。

二、強権をふるう支配者たち

主イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、〈あなたがたの知っているとおり、異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている〉。この時代はローマ帝国が圧倒的な軍事力によって地中海世界を支配していた。ローマはユダヤ人に重税を課し、財産を没収し、皇帝崇拜を強要し、反抗する者を虐殺した。エルサレムの神殿を中心とするユダヤの指導者たちやガリラヤの領主ヘロデ・アンテパスはローマにおもねるばかりか、自分たちも人民から可能な限り搾取し、暴政を行った(マルコ11・17、ルカ3・19、20)。「結局、世の中、金と力がすべてさ」と庶民が嘆くのは、昔も今も変わらない。

三、へりくだって仕えるイエス

しかし、イエスはこの世の人々とは正反対の生き方を弟子たちに要求された。〈あなたがたの間ではそうであつてはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない〉。そして、イエスは自らそのように生きて模範を示されたのである。〈それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである〉。〈あがない〉とは捕虜や奴隷を解放するための身代金である。イエスは自分に罪が無いのに、罪ある私たちを解放するために身代わりとなって死なれた。それは主が私たちを愛してくださったからである。

結論

私たちは厳しい競争社会に生きている。いつも何かに駆り立てられて走り続け、優越感と劣等感に揺れる。そこに安息は無い。イエスは私たちをこの奴隷状態から解放してくださる。キリストの愛に満たされて、僕として仕える喜びを味わおう。

研究資料

(小平徳行)

18・1～6に引き続いての地位論争。今回はイエスがご自身のエルサレムでの受難と復活を弟子たちに予告された後のことである。彼らはその意味を理解せず、彼の関心はもっぱら自分たちの地位にあった。

テキスト

20～21 **ゼベダイの子らの母** ここでは母親がイエスに願っているが、他の福音書では本人たちが願ったように記されている(マルコ10・35)。

22 **あなたがたは** イエスに直接願ったのは母親であったが、ここではその2人の息子である弟子たちに語りかけている。母親の嘆願の背景には、弟子たち自身の意思があった。それゆえ、イエスは母親の問題としてではなく、弟子たちの問題として対応された。**わかっている** もし彼らが御国の本性を本当に理解しているなら、このような要求をするはずはないということ。**わたしの飲もうとしている杯** 間もなくイエスが経験される十字架の苦しみを指す。これを飲むとは、イエスのための苦しみに耐えることを意味する。「できます」と答え

た これはイエスの言葉に反射的に答えたもので、自分たちが将来直面するであろう事態を十分予測したうえで述べたものではない。

23 **確かに：飲むことになろう** イエスは、彼らの生涯を見通されて言った。実際、ヤコブは教会における最初の殉教者となり(使徒12・2)、ヨハネも晩年、厳しい迫害を受け、パトモス島に流刑となった(黙示録1・9)。わたしのすることではなく、わたしの父によって備えられている人々だけに許されること イエスは彼ら二人の大首席を約束されなかった。これは父なる神の主権のもとに決められることであり、イエスはご自分をあくまでも神の使命を果たすためのしもべの位置に置いておられた。

24 **十人の者は：憤慨した** 二人が願ったことは、他の十人の弟子たちにとっても大きな関心事であった。彼らの反応は、自分が他の人々より高い地位に就きたいという意識が全員に巢食っていた事を暴露するものであった。先にイエスは、幼な子のように自分を低くする者が御国では一番偉いと教えられたが(18・4)、弟子たちは何一つ学んでいなかった。

25 イエスは弟子たち全員の問題であると思拔き、改めて御国の支配原理を明らかにされる。治め これは「押さえつけ」(使徒19・16)と訳されているように、権力で治めることを意味する。偉い人たち 字義訳は「大きい人たち」で大きな権力をもっている人々、高い地位にある人々を指す。権力をふるっている 「権力をほしいままにする、暴政をしく」の意。

26 仕える人(ギ)ディアコノス 主人とその家族のために食卓で給仕する人のこと。イエスはこの言葉を一般的な意味に広げられ、主人の意向をくみながら忠実に働く人という意味で使われた。偉くなりたい 前節の「偉い人たち」と同じ語根。

27 かしら これは「第一になる」の意で、前節の「偉くなる」よりはるかに強い内容を指す。僕(ギ)ドウーロス 字義訳は「奴隸」であり、これも前節の「仕える人」よりも強い表現である。本節は前節より強い表現を用いて、より深く謙遜になるようにとの思いが込められている。

28 ここまでイエスは弟子たちにどのような生き方をすべきかを教えてこられた。本節はそのクライマックス

で、メシヤとしての自らの到来の意味と目的を示すことにより、弟子たちが見習うべき模範を示された。仕えるため イエスの生活はまさに仕える歩みであった。イザヤ40・55章では「苦難のしもべ」の到来を預言している。そのしもべとはイエスご自身に他ならなかった。この奴隸の姿は十字架にかけられる前夜、最後の晩餐の席上で、手ぬぐいを取って、弟子たち一人一人の足を洗われたこと(ヨハネ13・4・5)に象徴され、その極限の姿は十字架の死により、ご自分の命を与えられたことによって表された。あがない(ギ)リュトロン 戦争の捕虜を釈放したり、奴隸を自由にする時に、それまでの所有者に対価として支払われたお金を指す。新改訳では「贖いの代価」、新共同訳では「身代金」。命(ギ)プシユケー これは生物学上の生命を意味するものとは異なり、肉体的、人格的なものすべてを含む言葉である。すべての人の贖いは、イエスの全存在が差し出されて完成したのである。

参考図書 中澤啓介『マタイの福音書註解(下)』(いのちのことば社)、増田誉雄『マタイの福音書』『新聖書注解・新約1』、他

聖書

マタイ20・20～28

タイトル

仕える人になってください！

暗唱聖句

人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである。

マタイ20・28

目標

仕える生涯を送られた御子を覚え、仕える生き方をする。

導入

(飯田勝彦)

18日から受難節（レント）に入っています。4月5日のイースターまで、イエス様が私たちを罪から救うために体験された苦しみを心に覚えながら過ごしましょう。イエス様の苦しみが分かるほど、私たちに對するイエス様の愛と恵みが大きなものになります。神の御子であるイエス様は、私たちを救うために低くなってくださいました。

イエス様のことより自分のことを考える人たち

イエス様は、ご自分が何のためにこの地上に生まれてきたかをよくご存知でした。イエス様に任せられた大きな

な使命は、十字架で死ぬことです。それは、私たちを滅びに向かわせる恐ろしい罪から救い出すためでした。イエス様は、恐ろしい十字架から逃げないでその道をしっかりと歩まれました。最後が近づくなかで、弟子たちに大切なことを話されました。それは、ご自分が十字架にかかって死に、復活することでした。このことは一度だけでなく、三度も繰り返し話されました。弟子たちはどのような思いで聞いたでしょうか。皆さんなら、イエス様の言われることを真剣に聞き、しっかりとそれを心に受け止めるでしょう。

イエス様の話が終わったあと、ヤコブとヨハネのお母さんが、息子たちと一緒にイエス様の所にやって来ました。そして、イエス様にお願いをします。「イエス様、この2人の息子を御国であなたの右大臣、左大臣にしてください」と。母親の心は、イエス様の死と復活ではなく、息子たちの地位に向けられていたのです。これを聞いた、他の十人の弟子たちは怒りました。ヤコブとヨハネの母親らの自己中心な思いは、弟子たちの仲を悪くしてしまつたのです。これを聞いたイエス様は、悲しまれました。

皆さんは、イエス様のことを考えず、自分の都合の良いことばかり考えていませんか？

私たちに仕えられたイエス様

私たちが「偉くなりたい、かしらになりたい」ということをイエス様は「そんなことを考えては駄目だ！」とは言われません。弟子たちに「偉くなりたいと思うものは、．．かしらになりたいものは」と秘訣を教えられたのです。

偉くなる、または、かしらになる方法を間違つてはならないと言われるのです。世間では、偉い人たちは人々を支配し、権力をふるいます。イエス様は、そうではなく「偉くなりたいと思う者は仕える人となりなさい。かしらになりたいと思う者は、僕となりなさい」と言われました。これは支配し権力をふるうこととは、真逆なことです。

もし、皆さんが他の人から支配され権力をふるわれたらどうですか。辛い気持ちになるでしょう。でも、仕え助けられたら、その人を信頼し、尊敬しませんか。

イエス様は、神の御子であり天のすべての権威を与えられていました。でも、イエス様はご自分の権威を振り

かざして人を支配しませんでした。弟子たちの足を洗ったり、病気で苦しんでいる人や立場の弱い人々の所に行つて仕えられました。最後には、私たち人間を救うために十字架で命を投げ出すほどまでに、私たちに仕えてくださったのです。イエス様が私たちに仕えてくださったからこそ、私たちはイエス様に助けられ支えられて幸せに生活することができず。

インドで貧しい人々に仕えたマザー・テレサによって、多くの人々が励まされ生かされてきました。イエス様から見て本当に偉い人は、隣人に心から仕えていく人です。勉強をしっかりと大学に入り、出世することは悪いことではありません。でも、それだけでなくイエス様のようになんかに仕えて行くにはどうしたらよいかを考えて歩みましょう。

まとめ

人に仕えることは、隣人を幸せにすることですが、自分も幸せになります。それは、仕えることでイエス様を体験し、その恵みを味わうことができるからです。

♪主の手足になろう♪ (ホ86、イン92)

聖書 マタイ22・34〜40 テーマ 一番大切な戒め

序論

(石田高保)

律法学者の言う「すべてのいましめ」とは、十戒を土台とする旧約の律法のことだ。613箇条あった。その中でどれが一番大切かと聞かれて、主は二つのいましめを挙げていた。それは神を愛することと、人を愛すること。二つあるようだが、実際は表裏一体で切り離すことができない。神を愛するとは、人を愛することであり、人を愛することによって、神を愛する度合いが計られる。十戒を見ると、前半は神への態度を規定したもので、いわば神を愛すること。後半は人への態度で、いわば人を愛することになっている。だからキリスト教とは、クリスチャンの信仰生活とは「神と人とを愛する道」と言える。

一、神を愛する

これは神の愛がわかってできること。神に愛されていることが身に浸みてこそ、神を愛することができる。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって」(Iヨハネ4・10)、私たちは本来、神を愛する愛

を持ち合わせていない。それは原罪を受け継いでいるために、生まれながらの人間には、自己中心性があるから。多くの人は、自分を愛してお造りになった神を愛するどころか、神を認めず、邪魔者扱いし、度外視して生きている。主を信じる前の私がそうだった。とても「神よ、あなたを愛します」などと言えない、いや思ったことすらない。神が私たちを愛して下さったとは、「わたしたちの罪のためにあがないの供え物として御子をおつかわしになった」(Iヨハネ4・10)。ここに本物の愛がある。

二、人を愛する

神を愛することと密着していて、切り離せない。これは神を愛することから生まれる。「わたしたちが愛し合うのは、神がまずわたしたちを愛して下さったからである」(Iヨハネ4・19)。私たちが本来、神を愛する愛を持ち合わせていないのと同様に、隣人を愛する愛も持ち合わせてはいない。人間の愛は、相手が可愛いから、愛すべきだから、自分によくしてくれるから、また良くして貰いたいから愛するという動機が潜んでいる。どんなに努力しても、人間の愛には限界がある。そんな私たちであるが、主の十字架をとおして神から愛されていることがわかると、神を愛す

るようになり、さらに今度は隣人を愛したいと願うようになる。しかし愛せない人を愛して行くためには神の恵みが必要。愛すべき人でも自分の敵に回って愛しにくい場合がある。それでも愛して行くためには、十字架で自己中心性を砕いていただき、聖霊に満たしていただいて、神の愛を注いでいただく。そのとき敵を愛し、迫害する者のために祈ることができる。

これは神を愛していることを裏付ける。〈自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ〉とは具体的にどういうことか。まず隣り人とは、家族、友人、知人、職場の人、地域の人の祝福を祈ること。身近な関係、難しい関係の人こそ、さばかないで祝福を祈る。あの人を変えて下さいではなく、この私を変えて下さいと祈る。その人に自分から交わりを求める。自分の方から親しくなるため出て行く。その人の必要に応える（仕える）。話を聞いてあげる。困っているときに助ける。悲しんでいるときに寄り添う。〈自分を愛するようにあなたの隣り人を愛〉することは黄金律につながる「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりとせよ」（マタイ7・12）。その上で、福音を伝えよう。チャンスをつらえて、自分の体験談を話した

り、他の人の証しをしよう。普段の地道な仕える働きが、相手の心を開き、救いに導かれやすくなる。隣人を愛することが、自然と伝道につながる。私たちの隣人は、まず愛の対象である。隣人をまず伝道の対象として見ると、こちらも肩肘が張り、相手も身構えてしまう。初めに隣人愛ありきである。さて、皆さんの愛の対象である隣人は誰だろうか。

結論

神と人とを愛する道、この生き方は意外にも、「とてもそんな立派な生き方はできません」と告白するところから始まる。この律法学者は、主のお答えを聞いて本当にそれとおりだと言った。しかし頭で理解したからといって、神と人を愛することができるわけではない。事実この律法学者は「あなたは神の国から遠くない」と言われている。主はこう言おうとしておられるのではないか。「あなたに足りないことがある、もう一步踏み切りなさい。それは私を信じて、身を任せて、従うことだ」。聖霊に満たされて神の愛を注いでいただく。そしてあなたの隣人の祝福を祈ろう。その人に仕えてその必要に応えよう。そして福音を語ろう。

研究資料

(小平徳行)

この箇所は受難週の火曜日、神殿において、イエスとユダヤ人の宗教的指導者たちとのあいだで繰り広げられた論争(21・23～23・39)の一つである。

テキスト

34 このイエスの教えはパリサイ人、サドカイ人との一連の論争の中でなされたものである。言いこめられた(ギ)エピモーセン) 言うべき言葉を失い、何を話してよいかわからなくなった状態を言う。

35 イエスをためそうとして 律法の専門家がこのような質問をしたのは、真理を追究するためではなく、イエスの評判を落とすためであった。イエスがある戒めを軽視しているように見えたため、この点を問い詰めることによって、イエスを非難できると考えたのである。

36 律法の中で これは十戒に限定せず、モーセ律法全体を指したものである。ユダヤ教のラビたちはモーセの律法を細分化し、成すべき命令が248、禁止命令が365、合計613の戒めがあると教えていた。そのすべての命令の中でどれが一番大切なかと尋ねた。これは学問的にも実

際的にも重要な問いであった。どのいましめがいちばん大切なのでしょう。これは直訳すると「どれが大きな戒めですか」となる。「大きな」を意味する(ギ)メガレーは、程度、階級について用いられる時、最上級の意を表わし、「いちばん大切な」という意味になる。

37～38 『心をつくし、…主なるあなたの神を愛せよ』

これは申命記6・5の引用で、「シエマ(聞け)」と呼ばれており、ユダヤ人が礼拝のたびに唱えるもので、一日に数回は復唱することを義務付けられている。心をつくし 「あなたの心全体で」の意。「精神」は魂、「思い」は理性を意味し、心、精神、思いは重なり合っている。これらの言葉を用いて、人間の全存在について言及している。愛せよ(ギ)アガペーセイス) これは神の愛に使われる。無償で自らをささげていく愛である。神を崇めることを何より先にし、神の聖なる意志に服することを何より大事にすることである。神を愛するとは、その戒めに従うことである。しかもそれは義務感で行なうのではなく、神を喜ばせたい一心であるものであるから、難しいものではない(1ヨハネ5・3)。シエマは唯一の神に対する全面的、全人格的愛を教えている。これはユダ

ヤ人であれば最も大切な教えとして幼い時から唱え続けてきたものであるため、イエスの答えを否定する者はいなかった。

39 第二もこれと同様である 律法学者が尋ねたのは一番大切な戒めについてのみであつたが、イエスは第二の戒めも同等に重要である事を述べた。神に対する態度と人に対する態度は切り離すことはできない。イエスはこの第二の戒めを守らない限り、第一の戒めを守っていることにはならないと考えておられた（Ⅰヨハネ4・20（21参照）。パリサイ人たちは神に対して熱心であると自負し、自分たちだけで分離派として一派を構え、権力者に対しては野党的存在となり、一般大衆に対しては、彼らを「アム・ハーアールetz（土民、無学の衆）」と呼んで見下げていた。シエマによつて自分たちを正当化しているパリサイ人たちに向かつてイエスは、隣人を愛することも同様に重要であると言われたのである。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』これはレビ19・18の引用である。あなたの隣人 旧約においては仲間のイスラエル人やイスラエルの血に寄留している外国人を指している（レビ19・18）。しかしイエスはこれを「あ

なたを必要としている人」（ルカ10・29（37）、「あなたに敵対している人」（マタイ5・43（44））にまで広げ、どのような人も隣人から排除されなかった。自分を愛するように：愛せよ 自分を愛することを当然のこととしている。「愛せよ」は37節同様、神の愛を表現する時に使う言葉が用いられている。愛は神の本性である。

40 律法全体と預言者 これは旧約聖書全体のこと。イエスはこの二つの戒めの中に神の全ての律法が含まれると見なされた。そしてこの愛に生きることが、律法主義からの解放であり、律法の完成といえるのである。イエスはこのことを他のところでも教え（マタイ7・12）、パウロも同様に教えている（ローマ13・8（10）、ガラテヤ5・14）。さらには、愛がなければいっさいは無益だと教えており、愛を追求めよと命じている（Ⅰコリント13・1（14・1））。

クリスチャンの生涯は、キリストの愛に応答し、内住のキリストにより、愛を動機として歩み、愛に成長し、愛に完成されていくものである。これがキリストに似た者とされることであり、真のホーリネスである。

参考図書 2月22日分と同じ。

聖書

マタイ22・34〜40

タイトル
暗唱聖句

神様が喜び、あなたが幸せになるために
心をつくし、精神をつくし、思いをつく
して、主なるあなたの神を愛せよ。

マタイ22・37

目標

一番大切なこととして、神を愛し、隣人
を愛する生き方をする。

導入

(飯田勝彦)

今、皆さんが住んでいる家は木造ですか？

国の重要文化財などに立派な木造の建物があります。
木造の家には、沢山の柱がありますが、その中で一番大
切な柱を何とか知っていますか？ それは「大黒柱」
です。大黒柱は、建物を支えるとても大切な柱です。で
すから、それが倒れると、建物全体が崩れてしまいます。
律法学者たちがイエス様に「先生、律法の中で、どの
いましめが一番大切ですか？」と尋ねました。するとイ
エス様が答えられました。

全力で神様を愛するということです

イエス様は大切な第一のいましめは「心をつくし、精

神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せ
よ」であると言われました。

一言でいうと「全力で神様を愛しなさい」ということ
です。でも、そう言われてもピンとこないでしょう。

皆さんは、学校の体育の授業で50メートルを走ったこ
とがあるでしょう。先のゴールをしっかりと見つめて、
全力で手を振り、足を上げてゴールするまで力いっぱい
走り続けるでしょう。そのような感じで神様を愛するこ
とを、神様はあなたに願っておられるのです。神様は、
あなたがどこにいても、何をやっていても、どのような
時でも神様を愛することを待ち望んでいます。

それほどまで、神様はあなたと愛し合う関係を求めて
おられるのです。神様が私たち人間をお造りになった目
的は、互いに愛し合うためでした。私たちは、神様から
愛される体験をして初めて心が安らかになります。そし
て、私たちも神様を全力で愛して初めて幸せになれるの
です。

実は、私たちが神様を全力で愛する前から、神様の方
が私たちを全力で愛してくださいました。神様は全力の
愛を言葉だけで終わりにされませんでした。全力の愛

で、行動をもって愛してくださいましたのです。それがイエス・キリストの十字架です。神様は、罪の中で苦しむ私たちを、助けたいと願われました。そして、愛する御子イエス・キリストを十字架にかけて死に渡されたのです。聖書に「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで永遠の命を得るためである」(ヨハネ3・16)とあります。

神様の全力の愛を体験した人は、神様を全力で愛する人に変えられます。神様はあなたの全力の愛を喜んで受け入れてくださいます。

自分を愛するように隣り人を愛することです

イエス様は続けて「自分を愛するように隣り人を愛しなさい」と言われました。これも第一のいましめと同じように大切なことでした。隣り人とは誰のことでしょうか？ 家族や友だち、学校の先生、地域の人たちです。皆さんは互いに憎み合い、傷つけ合うことより愛し合うことを願うでしょう。隣り人を愛するには、まず自分を愛することが欠かせません。人を赦せず憎んだり、相手を批判したりすることは、相手を傷つけるだけでなく、

実は自分も傷つけることになります。それは、決して自分を愛していることにはなりません。自分を愛せないと、隣り人を愛することが難しいのです。ですから、まず私たちを愛してやまない神様の愛を頂く必要があります。神様の愛が分かると自分を愛することができるようです。そして、その愛が隣りに流れて行くのです。

隣り人を愛するとは、隣り人の幸せを祈ることです。祈っていると不思議ですが、神様が隣りに積極的に関わっていく力を与えてくださいます。皆さんの周りには、寂しい思いをしている人や「愛されたい」と思っている人がたくさんいます。神様は、あなたを用いて神様の素晴らしい愛を届けようとしておられます。

まとめ

イエス様が言われた大切ないましめを守ることは、神様が喜ばれるだけではなく、私たちも喜びと幸せに満たされます。神様を愛し、自分を愛し、隣り人を愛する恵みを体験して過ごしましょう

♪あいをください♪(ホ78、イン67)

聖書 マタイ25・1～13 テーマ 主の再臨に備える

序論

(金井信生)

年度末に向かい、再臨の主の前にやがて人生のしめくりがあることをおぼえましょう。今日は、「十人のおとめ」のたとえを通してイエスの教えられた、世の終わりに対する日々の心備えを学びます。

一、花婿を待つ

イエスは「場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」(ヨハネ14・3)、「しかり、わたしはすぐに来る」(黙示録22・20)と約束されました。それは「小羊の婚宴」(黙示録19・9)すなわち、花婿であるキリストが、教会を花嫁として迎えられる日です。

イエスの話す譬え^{たと}にも、神の国を宴会に譬え、用意が整ったら客を招く話がいくつもあります。喜びの宴が備えられていることと、その時が来たら招きに直ちに応じることが、いつもおぼえていることが大事です。

今日の譬えでは、花嫁に付き添うおとめを通して、キリストを待つ心の備えが教えられています。今はまだ、準備の時であり、忍耐の時です。しかし、やがて訪れるのはすべての労苦から解放され、喜びが満ちる日です。私たちは過去を待つのも、今を待つのもなく、主の言葉に従って約束の日を待つのです。

二、待つ者の備え

おとめたちは「あかり」を手にして待っています。現代のように、「そろそろ近づいたから」と事前に連絡が来るわけではありません。いつ来られてもいいように、「あかり」を常に手にしていなければならないのです。イエスは「あなたがたは世の光である。…あなたがたの光を人々の前に輝かし」(マタイ5・14、16)なさいと教えられました。私たちは霊的な暗黒に閉ざされ、行き悩んでいる世にあって、真理の光、命の光を輝かせ続けるように導かれている者です。

また、これも現代と違って、「あかり」はたいまつであってもランプであっても、燃料を補わないと、すぐに消えてしまいます。「油断大敵」という言葉をすぐ思い出す

ようなたとえです（本来の語源は少し違うそうですが）。私たちの信仰生涯を、いつも輝いたものにするにはどうしたらいいのか、ここには〈油〉を用意していた者として用意していなかったものとに分かれています。

〈油〉は、聖書の中ではしばしば聖霊を象徴しています。旧約時代の王や祭司、預言者は頭に油を注がれて、神の霊に満たされるべき職務に任じられました。

ここでは、「輝き続けなさい」と命じられる主が、輝くための必要を、常に満たし続けてくださっていると受け止めてよいでしょう。主の臨在を忘れて、周囲の波風におびえたり、空しい楽しみに心を奪われていると、すぐに闇に飲み込まれてしまうような私たちです。主からの喜びを、希望を日々いただくよう、賛美と感謝、祈りと御言葉にあふれた歩みに励みましょう。

三、目をさまつていなれ

〈目をさましていなさい〉とは、おとめたちが居眠りしてしまったことを責めているではありません。イエスは、私たちが弱い存在であることをご存知です。ただ、あかりを手にしている意味を、また輝かせ続ける必要を

意識しているかどうかを問うておられます。これは人任せにはできません。一人一人が、キリストの救いを自分のものとし、恵みをおぼえることです。

結婚を二人が決めるのは一つの時点ですが、実際の結婚式に、またその後の生活のための準備はしばらくの間があります。

キリストの救いも、救われたときから主と共に歩み始め、恵みに満たされて光を放つて行くように導かれています。備えない者への厳肅なさは確かにあります。備えているつもりでも、風が吹いたり、油が切れそうになつてあわてることもあるかもしれません。だからこそ、共にいてくださる主にすべてを委ね、日々み言葉に従っていくなら、主が私たちを守り支えてくださいます。

結論

うれしいときもかなしいときも、主と共に歩み続けるよう、霊の目を覚まして、主のご再臨に備えましょう。

研究資料

(中島啓二)

「忠実な思慮深い僕」(24・45)として、主の来臨を待ち望むべきであることを教える前章を踏まえ、この章では、まずこの「十人のおとめのたとえ」(1～13)を通して「思慮深さ」の面が、続く「タラントのたとえ」(14～30)を通して「忠実」であることが扱われる。

テキスト

1 花婿 キリストを指すことは明白だろう。十人のお

とめ 婚礼の一連の行事の間中、花嫁に付き添い世話をする女性たち。教会はキリストの花嫁にたとえられることが多いが、ここでは、主の再臨を待ち望む教会（あるいはクリスチャン）を、花嫁ではなく、この付き添いの女性たちになとえている。天国は~~に~~に似ている 天国は単なる来世のことだけではない。マタイ福音書の言う天国は、ルカ福音書の神の国（神の支配とも訳すことができる）に相当する。それはキリストの降誕によって既に地上にもたらされ（ただし未完成）、やがて終末の時に完成するものである。再臨までの「教会の時代」は、その「既に」と「未だ」が混在している状態である。そん

な中間の時代にあつて、再臨を待ちながら過ぐすクリスチャンの心構えをイエスは教えるのである。あかり 棒にばる布を巻き付けた松明^{たいまつ}かもしれない。この種の松明の布は短時間で燃え尽きてしまい、その都度、別の布で包み直し、油を含ませねばならなかった。花婿を迎えに出て行く 少し後の時代のものだが、パレスチナの一般的な結婚式の手順が知られている。まず夜の祝宴に向けて、花婿が花嫁を迎えに来る。その花婿を花嫁の付き添いの女性たちが外に迎えに出る（花嫁は家の中にいたまま）。そして新郎新婦と付き添いの女性たちが行列をつくって花婿の父の家まで進んでいき、そこで祝宴が開かれるのである。時代は少し異なるが、このたとえの婚礼もほぼそのような手順であつたと考えられる。

3 思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった 花婿を待っている間も火をともしておくのか、それとも到着の報を聞いてから火をつけるのかはわからない。いずれにしても大事なことは、彼女たちは（時間どおりであるうが遅れようが）花婿が到着したならば、その時から始まる大事な役割に備えて、油を十分に用意しておく必要があつたということである。

4 思慮深い者たちは：油を用意していた 万一に備え油を用意していたことが「思慮深い」と呼ばれる理由である。油は聖霊を象徴するものとされるが、ここでもそう捉えてよいだろう（ただし、そこまで意図されていないとする注解者もいる）。

5 彼らはみな居眠りをして、寝てしまった 思慮深い者たちも寝てしまったことに注意。「目をさましていないさ」（13）というこのたとえの結論からすると、彼女たちにも落ち度があるようにも思えるが、彼女たちは叱責を受けずに、その後の役割を果たし、祝宴の恵みにあずかっている。

6 夜中に：呼ぶ声がした 「思いがけない時に人の子は来る」（24・44）とあるとおりである。

8 あかりが消えかかっています 「悪しき者のともしびは消される」（箴言13・9、ヨブ18・5参照）のイメージが背後にあるのかもしれない。

9 わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう 分け合うならば全員の油が不足し、結婚式が台無しになってしまう。主の再臨に備えておくという信仰の姿勢は、他の誰かと貸し借りできるような類のもの

のではないのである。

10 用意のできていた女たち 婚宴の部屋に入ることができたのは「用意ができていた」からであった。戸がしめられた 救われる者と滅びる者とがひとたび定まれば、もはやそれを変えることはできない。

11 ほかのおとめたち 花婿の遅れに備えていなかったばかりに、婚宴の部屋から閉め出された彼女たちは、今や「その他」の存在に落ちぶれた。

12 わたしはあなたがたを知らない 最後の審判の厳粛さを思い知らされる言葉（7・23参照）。

13 目をさましていなさい 前述のように、思慮深い女たちも眠っていたが、それはこの警句と矛盾しない。彼女たちは来たるべき時への備えが十分にできていたゆえ、祝宴に連なることがゆるされたのである。クリスチャンは再臨に備えて、日常生活に支障がでるほど気を張り詰めている必要はない。ただし霊的には目を覚まし続け、そのことによって準備が整っていることに安心し、平安のうちに再臨を待ち望み続けなければならない。

参考図書 注解書 D. H. Hagner (Word), D. Hill (NCB), その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖書

マタイ25・1～13

タイトル

主の再臨に備える

暗唱聖句

目をさましていなさい。その日その時

が、あなたがたにはわからないからである。
マタイ25・13

目標

霊の目を覚まして、主のご再臨に備えた
生き方をする。

導入

(水野晶子)

目覚まし時計が鳴っても「もうちょっと」と目覚まし時計を止めて寝てしまい、「さあ、起きなさい。学校に遅れるよ」と布団をはがされ、しぶしぶ起きて支度を始めたところが、シャツを後ろ前に着てしまい、あわてて着直し、学校へ持っていくものを用意しようとする、探すのに時間がかかり、結局、遅刻してしまいました。前もって準備しておくことが必要ですね。

イエス様はみ国に帰られるとき、再びこの地上においてになることを約束されました。それがいつなのかはわかりません。その日に備えることが大切です。どんな準備が必要でしょうか。

十人の女の人の話

イエス様がまたおいでになる約束は素晴らしい約束です。「わたしは天のお父様のところに行くのです。わたしのお父様のところには大きな家がたくさんあります。あなたがたのために、その家を用意しに行くのです。そしてその家の用意ができたなら、またあなたがたを迎えに来ます」と言われました。イエス様は花婿として来られます。そして、教会が花嫁として迎えられますのです。イエス様は弟子たちに、この日に備えて、どのように待てべきかを譬えでお話しになりました。

あるところに十人の若い女の人がいました。結婚式に招かれたので、結婚式にふさわしい一番いい着物を着てウキウキして出かけました。ところが花婿がいつまでたっても来ないのです。暗くなってきました。花婿を迎えるために、油の入ったランプをつけて、待つことにしました。5人の女の人は遅くなくてもいいように十分油を持っていたましたが、他の5人の人は油のことなど考えていませんでした。真夜中になりました。みんなとうとう眠ってしまったのです。ところが突然、「花婿がお着きになりました。迎えに出なさい」と呼ぶ声にびっくり

して、目を覚ましました。賢い女の人のランプはあかかと燃えていました。他の5人の女の人たちのランプは消えそうでした。あわてて油を買いに行きましたが、その間に結婚式は始まり、戸がぴつたりとしまつて、その5人の女の中に入れてもらえませんでした。

イエス様を待つ備え

結婚式に招かれた女の人とは、イエス様を信じている私たちのことです。私たちはイエス様を待つために、どんな備えが必要でしょう？

①「イエス様は私の救い主」と信じる信仰を持ち続けることです。イエス様は私たちを天国に入れてくださるために、十字架にかかり死んでよみがえってくださいました。このイエス様を信じて神様の子供にしてくださいました。この信仰が天国行きのパスポートです。

②女の人たちはあかりを持っていました。私たちは、イエス様を信じて光の子です。世の光として輝くために、いつも聖霊に満たされ、祈り、み言葉に養われ、賛美し感謝しながらイエス様を待ちましょう。

③女の人たちは、花婿が来るのがあまりにも遅くなった

ので、居眠りをしてしまいました。イエス様はいつ来られるのかわかりません。「目を覚ましていなさい」とのみ言葉を、いつも心に覚えていきましょう。悪魔は、遊びやゲーム、いろいろな夢中になるものに心を向けさせ、イエス様のことを忘れるように仕向けてきます。また、罪を犯させて神様から引き離そうと誘惑してきます。だから、目を覚まして、いつも共にいてくださる主にすがっていきましょう。

まとめ

イエス様にお会いするのは楽しみです。イエス様が来られる時まで、いつもイエス様によって救われたことを感謝し、イエス様が愛してくださっていることを覚え、恵みで光を放っていたきましょう。いろんな嵐が来るかもしれません。信仰の火が吹き消されそうになるかもしれません。でも大丈夫、主に全部を任せて従っていきましょう。主が守り支えてくださいます。

♪まもなくあなたの♪(新聖歌475、PW48、イン107他)、
♪おきてうたおう 子どもたちよ♪(PW32)

聖書 マタイ26・26～29 テーマ 契約の血

序論

(石田高保)

よく知られた聖餐制定の場面である。いわゆる過越の食事の最中、イエス様は今日に続く「主の聖餐」を定められた。出エジプトを記念する過越の食事から、種入れぬパンとぶどう酒だけを取り上げて、「わたしを記念するため、このように行いなさい」(Ⅰコリント11・24)とクリスチャンの共同体が繰り返し行うように命じられた。それをおして「わたしの契約の血である」と言われたキリストとの新しい契約を確認するためである。ではその内容は何であろうか。

一、神の命にあずかる契約

主は今ひとつのパンを手を取って祝福して裂き、弟子たちに与えて言われた「これはわたしのからだである」と。これには伏線がある。五千人の給食のあと主の言われたことである。「わたしは天から下ってきた生きたパンである……わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉である」(ヨハネ6・51)、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり」(同6・

54)。つまり主はご自分の肉と血を食べて生きるようにと私たちを招いておられる。人間はもともと、言うならば神を食料とし、あるいは燃料として生きるように設計されている。ここで言う肉と血は、もちろん文字どおりではなく、イエス様との生き生きとした関係のことである。教会はキリストのからだであるから、私たちが意識しなくてもイエス様とつながっている。その上でその肉を食べ血を飲む、つまり意識的に主につながり続けるという信仰の営みを、聖餐は助けるのである。「主は私のうちにおられる」と告白するだけではなく、聖別されたパンを食べ、ぶどう酒を飲むことによって、知性だけでなく視覚や触覚、味覚によっても主の臨在を確認できる。イエス様は見る、さわる、食べる、飲むという感覚的な営みによっても信仰を働かせられるように備えて下さった。それは洗礼も同様であるが、身体的行為によっても神はご自分の命を私たちに注いでくださる。神は霊的行為のために、パンやぶどう酒といった物質的なものを用いなさる。そして聖餐によって私たちはイエス様と合一し、一体であることを理屈抜きで体感することができる。聖餐は教会に一致をもたらす。教会の仲間と神の家族意

識、キリストのからだ意識を共有することができる。そこから聖霊によって互いに仕え合い、与えあい、支え合うという愛のわざに立ち上がりたい。

二、神の赦しにあずかる契約

「これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である」と言われているからといって、聖餐のぶどう酒がイエス様の血そのものではない。しかし主がこのぶどう酒はわたしの血であると宣言しておられる以上、それを信仰によってイエス様の血として飲むとき、私たちの内には聖霊によって神の恵みのわざが起こされる。それは罪の赦しかもしれない、自我の死の確信かもしれない、いやしのわざかもしれない、栄光の望みかもしれない。とにかく儀式以上のことが起きると期待すべきである。また聖餐に同席している求道者の内にも、主の臨在が明らかにすることを信じよう。

では契約の血とはどういう意味であろうか。それは神がイスラエルと結ばれた古い契約に代わって、イエス様のご自身に従う者と結ぼうとする新しい契約のことである。それは十字架で流された血によって完全なものと

なった。「供え物やいけにえはささげられるが、儀式にたずさわる者の良心を全うすることはできない」(ヘブル9・9)とあるとおり、旧約時代の動物犠牲による罪の贖いは、けつきよく良心のとがめを取り除くことはできなかった。しかし「キリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き」(同9・14)とあるように、主が十字架で流された血は、二度と蒸し返されることがないほど完全に罪を取り除くことができるようになった。そのいけにえの違いを顕著に証しているのがバプテスマのヨハネである。彼はイエス様を指さして「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言い放ち、イエス様こそ究極のいけにえであり、贖いを完成する方であると看破した。だから私たちが聖餐にあずかることによって、キリストの血による新しい契約を確認し、信仰を新たにすることができる。いわば新しい契約に押された実印は、イエス様の血である。

結論

聖餐は洗礼と共に「見える神の言葉」と言われ、神の命と真理を理屈抜きでわからせるためにイエス様が定めて下さった。これにあずかる機会を意義深く用いよう。

研究資料

(小平徳行)

最後の晩餐と言われる、過越の食事の場面である。イエスは十字架への受難の道を歩まれる。ここで聖餐の制定がなされた。イエスはパンとぶどう酒を弟子たちに配られ、それに新しい意味を付与された。パンは十字架上で裂かれるイエス自身のからだ、ぶどう酒は、十字架上で流される血を表す。イエス以降の代々の教会は、この食事を主の聖餐式として守り続けている。

テキスト

26 一同が食事をしているとき これは過越の食事である。イエスはパンを取り このパンは過越の食事の種なしパンである(出エジプト12・15、13・3、7、申命記16・3)。パウロは教会から古いパン種を取り除くようにと警告しており、パン種を誇り、悪意、邪悪を象徴するものとして言及している(1コリント5・6-8)。なお、聖餐式においては東方教会では常に、西方教会でも798年までは種なしパンにこだわることはなかった。祝福して パンを祝福したのではなく、神をほめたたえたという意味。食事の時にささげられる定型的な祝福の祈り

のことかもしれない。新共同訳聖書では「賛美の祈りを唱えて」となっている。これをさき イエスが一つのパンを裂かれたことを強調している。取って食べよ 弟子の一人一人が主体的に、この主の晩餐に深く関わることを示唆している。パンを備えられるのはイエスである。しかし、このイエスの契約が、私たちに真に有効なものになるには、一人一人が自らの意思に基づいて、パンを取る必要がある。イスラエルの民は、それぞれが出エジプトを経験する者として過越の食事にあずかった。それと同様に、御国の民の一人一人は、イエスによる罪の贖いにあずかる者としてパンを取るのである。これはわたしのからだである 裂かれたパンはイエスのからだを象徴し、十字架の死を表わしている。この句は教会史上激しく論争されてきた。パンはキリストのからだそのものである、キリストはパンと共におられる、パンはキリストの象徴である、パンはキリストを記念するものである、など様々な解釈がある。本来、聖餐は教会の一致を表すシンボルとなるはずのものであるが、神学の論争課題になってしまっている。

27 杯を取り 通常、杯は苦悩、死、裁きなどを象徴す

る。ここで単数形が用いられているのは、弟子たちがイエスの契約にあずかる一つの共同体であることを示唆している。**感謝して** 前節の「祝福して」とほぼ同義。過ぎ越しの食事の際に唱えられた公式の感謝の祈りを指すと考えられる。**みな、この杯から飲め** イエスはご自分の弟子たちに対し、みな同じ杯から飲むように命じた。この杯にあずかることは、イエスの共同体の一員であることを示す。

28 わたしの契約の血 イエスご自身が契約を締結させるために流された血という意味。主なる神がイスラエルと結ばれた古い契約は、民が神の命令に従わなかったために破棄されてしまったゆえ、神は預言者エレミヤを通して、やがて神はイスラエルの民と新しい契約を結ぶと語られた(エレミヤ31・31～34)。この預言の成就として、イエスは御国の民と新しい契約をご自身の血によって結ばれたのである(ヘブル8・6～13)。この新しい契約において、主の聖餐が過越の食事に取って代えられたのである。**罪のゆるしを得させるように** イエスはご自身の血が罪を赦すために流されるものと解説された。罪の赦しのために血が流されることが必要であることはモーセ

律法以来説かれ続けてきた。神殿において多くの動物の犠牲の血が流され続けてきたのは、みな罪の赦しのためであった。しかし、イエスはご自身の血がそれに取って代えられたと宣言されたのである。それはただ一度だけ流され、永遠の贖いを全うするものであった(ヘブル9・12)。**多くの人** セムの表現で包括的な意味をもち、すべての人の意。**流す** 現在分詞形が使われており、イエスの赦しがいづの時代にも有効であることを表している。過越の食事の際にはパンと飲み物について、出エジプトに関する説明がなされてきた。同じように、ここではイエスがパンとぶどう酒について、十字架による贖いの契約の意味があることを説明している。

29 その日まで 終末の御国における宴会が催される日まで(黙示録19・6～8)。御国の民は、その時までイエスの贖いの死を覚え続けるために聖餐式を守り続ける。聖餐式は、過去になされたイエスの贖いのわざを振り返る時であると同時に、未来に約束されているイエスとのすばらしい宴席を待望する時でもある。そして今ここに臨在されるイエスを仰ぐ時である。

参考図書 2月22日分と同じ。

聖書

マタイ26・26～29

タイトル

最高の喜びをもつて歩もう！

暗唱聖句

これは、罪のゆるしを得させるようにと、

多くの人のために流すわたしの契約の血

である。
マタイ26・28

目標

契約の血として流されたキリストの血を
覚え、罪のゆるしを受け取る。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは「指切りげんまん」って知ってますか？ 約束をするとき、約束をする相手と小指を絡ませて「指切りげんまん。嘘ついたら針千本のくすす・・」と歌います。これはお互いに約束を必ず守ることを表しています。皆さんも友だちとこれまでにたくさん約束をしたでしょう。その約束は全部守られましたか？ 「このことは内緒だよ」と約束したのに、誰かに話したりして約束をやぶったことありませんか？ お互いに約束を守ることは、大切なことですよね。イエス様は、私たちに約束よりもっと重みのある「契約」をしてくださったのです。

あなたのために裂かれたイエス様の身体

皆さんは、教会で聖餐式を見たことがありますか。

この箇所は、聖餐式のときに読まれるみ言葉です。聖餐式は人が決めて行っているものではありません。イエス様が最初に行われ、私たちに定めてくださったものなのです。教会は、この聖餐式を2千年の間、大切に守りその恵みを受けてきました。皆さんも是非、聖餐の恵みを受けられますように！

最初の聖餐式が行われたとき、弟子のユダは、イエス様を殺そうと計画していた祭司長たちから銀貨三十枚を受け取っていました。イエス様も自分が十字架にかけられることを自覚しておられたときでもありました。ご自分の死を目の前にしてパンを取り、「取って食べよ、これはわたしのからだである」と言われ、パンを裂き弟子たちに配られました。

イエス様は、私たちを罪から救うために、鞭で打たれ手足には釘を打たれて十字架につけられました。そして、最後は槍でお腹を刺されたのです。イエス様は、ご自分の身体を裂くことで私たちを罪から救い出してくださいました。私たちはイエス様の裂かれた身体によって、闇から光

へ、滅びから永遠に移され、罪に染まった心が豊かに養われていくのです。イエス様は「わたしが命のパンである」(ヨハネ6・35)と言われました。聖餐式のパンは、まさにイエス様が裂かれた身体を表しています。私たちはこのパンを頂くことを通して、イエス様の救いの恵みを新たにし、イエス様が「私の内におられ、イエス様と一つである」ことを体験します。

あなたのために流されたイエス様の血潮

イエス様は杯を取られ、「みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である」と言われました。聖餐式のぶどう酒(汁)は、イエス様が私たちのために流してくださった血を表しています。聖書の中に「血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない」(ヘブル9・22)とあります。旧約の時代、人々は自分の罪をゆるしてもらうために、神様が定められた動物をいけにえとして捧げました。捧げる動物の頭に手をおき自分の罪を負わせます。その動物が祭司の手に渡り、血を流して死ぬことによって、いけにえを捧げた人の罪はゆるされたのです。しかし、動物の血は完全に私たち人間の罪を拭い去ることはできませんでした。

神様は、罪に悩む私たちを心の深くまで完全に罪をゆるしきめるために、イエス様を送ってくださいましたのです。イエス様は、私たちを罪から解放するためにいけにえとして神様に捧げられたのです。「イエス様が苦しみの中で流してくださいした血は、私の罪のためでした」と信じ告白するなら、イエス様は私たちの罪をすべてゆるしきよめてくださいます。

人の約束は破られることもあります。でも、「わたしの契約の血」であるイエス様の契約は、決して変わりません。ですから、イエス様が流された契約の血を心に受け入れるとき、皆さんは永遠にイエス様のゆるしときよさにあずかることができます。私たちの心を苦しめるのは罪です。でも、イエス様の契約の血によって「罪がゆるされた」、「罪がゆるされている」という確信をもって歩めるなら、人生は最高のものになります。

まとめ

イエス様はあなたを契約の中に招いておられます。イエス様の契約の血を受け取り、罪ゆるされた最高の喜びをもって歩みましょう。

♪じゅうじか わが力♪ (ホ115)

聖書 マタイ26・47～56 テーマ 捕らえられたイエス

序論

(長田栄一)

ゲツセマネの園で、祈りの内に確信と勝利を得られた主は、静かに十字架の死に向かわれます。園に押し寄せた群衆たちの物々しき、弟子たちの行動の過激さの中で、捕らえられ、連れ去られようとする主の落ち着き、物静かさが際立ちます。

一、ユダと主イエス

群衆たちの先頭に立っていたのは、〈イエスを裏切った者〉、〈十二弟子のひとりのユダ〉でした。主は既に、弟子たちに対して、「あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」と言われ、ユダに対して、「いや、あなただ」と明言しておられます(26・21、25)。何もかも見抜いておられたはずの主イエスは、接吻をもって裏切ろうとする弟子に対して、ただ言われます。〈友よ、なんのためにきたのか〉。悲しみ、寂しさの中にも、悲劇的な終わりに向かって進もうとするユダを思いやりつつ、最後の問いかけの言葉として、愛を持って語られ

たお言葉でした。

父の御心に静かに従おうとする主のお心は、寝食を共にした弟子の裏切りの中でさえも、乱されませんでした。裏切る弟子さえも、「友」として、愛と真実とをもって接する主のお姿がそこにはあります。

二、弟子たちと主イエス

片や、弟子たちの中には、剣や棒を持って近づく群衆たちに対して、過激な反応をする者もありました。〈イエスと一緒にいた者のひとり〉、すなわちペテロは、〈手を伸ばして剣を抜き、そして大祭司の僕に切りかかって、その片耳を切り落し〉ました。

これに対して、主は、〈あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる〉といさめられます。落ち着き払った主のお言葉に、振り回し続けられようとする剣の動きは止まり、やがてさやに収められます。

一触即発の緊張した状況の中で、このような主の落ち着きはどこから来ていたでしょうか。続くお言葉の中に、その第一の秘訣が明らかにされます。〈それとも、わたしに父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つ

かわしていただくことができないと、あなたは思うのか。この緊急事態をも統べ治めておられる御父への信頼がそこには表わされています。御父は、主が願われたならば、ただちに天使の十二軍団をもお遣わしになることができるとの信仰です。

しかし、続くお言葉は、主の落ち着きの第二の秘訣をも明らかにします。へしかし、それでは、こうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか。すなわち、どこまでも御父の御心に従おうとする、従順による確信です。

十字架の死を前にして、主のお心の中では、最終的な結論がゲツセマネで既に出されていました。御父の御心がこのところにしかないことが示され、主もまた、「みこころが行なわれますように」と、その道を進む決断が既に下されていました。

私たちの心が、時として波打ち、悩み、戸惑うのは、御心の道が分からないからでしょう。あるいは、薄々分かっている、従う決意が定まらないからかもしれない。『ささげつくし あけわたしし 心こそたえなれ』（『聖歌』五五六番四節）、従順の道に定められた心こそ、

確信と平安の生涯の秘訣となります。

三、群衆と主イエス

最後に、押し寄せる群衆に向かって、主は問いかけられます。『あなたがたは強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえにきたのか。これまで毎日宮に座って教えておられた間、いくらでも主を捕らえる機会があったはずですよ。しかし、その間彼らがそうしなかったのも、今この時、彼らがするようにして主に近づくのも、天の父のご計画の中にあることでした。主はそのことを次の言葉でなお明確にされました。へしかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書いたことが、成就するためである』。

結論

主は捕らえられ、あれほど勇ましいことを語っていた弟子たちは逃げ去ります。その中で、主は、十字架の死に向かつてなお進まれます。「死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」（ピリピ2・8）。私たちのためにこの道を歩んでくださった主によって、私たちの今があります。私たちもまた、同じ道を進もうではありませんか。

研究資料

(小平徳行)

イエスはゲツセマネの祈りにおいて、全人類の贖い^{あがな}のために十字架の苦悩を引き受ける備えをされた。そこにユダを先頭に兵士たちがやってきて、イエスは逮捕されることになる。

テキスト

47 そこに十二弟子のひとりのユダがきた 巡礼者たちは祭りの期間中、都や近くの村に宿を取るか、都の周辺にテントを張って夜を過ごした。特に過越の食事を取る晩は、エルサレム市内で一晩を明かすことになっていた。ユダはイエスたちの一行がゲツセマネで夜を過ごすことを予測してやって来たのであろう(ヨハネ18・2)。大ぜいの群衆 いわゆる群衆のことではなく、ユダヤの指導者たちが派遣したレビ人のユダヤ兵士とローマ兵士の混成部隊のこと(ヨハネ18・3、12)。これほど多くの兵士たちが派遣されたのは、イエスやペテロをはじめとする弟子たちが死を覚悟して反撃してくると予想したのかもしれない。

48 派遣された兵士の中には、イエスと面識がなかった

者も多かったに違いない。それに暗闇であつたため、間違つてイエス以外の人物を逮捕するようなことがないよう、あらかじめ打ち合わせておいたのであろう。接吻する(ギ)フィレーソー 原義は「愛する」である。弟子が師に向かって先に口づけすることは普通なされない。ゆえにユダの行動は自分とイエスは対等であるという意思表示であつたかもしれない。

49 先生 ユダはイエスを「主」と呼べなかった。いか
がですか(ギ)カイレー 「喜びあれ」が原義で普通のあいさつ言葉である(マタイ28・9)。接吻した(ギ)カテ
フィレーセン) この語は前節の「接吻する」に強意詞を加えたもので「しっかりと口づけした」と訳すことができる。他の福音書では口づけで裏切ることが、いかに矛盾した、卑劣な行動であるかを指摘している(ルカ22・48)。

50 友よ(ギ)エタイレー) これは親しさを表す言葉であり、イエスは裏切る者に対して友好的な態度を取り続けている。しかしこの言葉は弟子や信者の間では使われず、幾分か距離のある人に対して使われた(20・13、22・12)。なんのためにきたのか この文は、疑問文にも命

令文にも訳することができる。疑問文であれば、「なんのためにきたのか」となり、それは単純な疑問ではなく、もう一度自分の行動について自問自答せよという意味も込められており、悔い改めの機会を与えるものであった。もし命令文であれば、新共同訳のように「しようとしてゐることをするがよい」となり、ご自分が逮捕される場面でもイエスの権威が強調されていることになる。

51〜52 イエスと一緒にいた者のひとり イエスの弟子のことで、これはペテロであり、片耳を切り落された大祭司のしもべはマルコスであった(ヨハネ18・10)。この時、他の弟子たちも同じような行動を取ろうとしていた(ルカ22・49)。イエスはペテロに剣を納めさせ、大祭司のしもべの耳を癒された(ルカ22・51)。武力によって抵抗する事は自殺行為に等しく、それによって混乱と悲劇がもたらされることは容易に想像がついた。これは弟子たちを巻き添えにしないための配慮である。

53〜54 わたしが父に願って、天の使たちを… イエスはこの地上におられても、天の軍勢を率いる絶対的権力をもっておられた。しかしそれをされなかったのは聖書の成就のためであった。聖書の言葉 これはイザヤ53章、

ゼカリヤ13・7などが考えられる。どうして成就されようか イエスが聖書に絶対の権威を認め、その聖書に基づきながら自らの歩みを進めていたことが表れている。

55 強盗(ギ)レーステン(ギ) これは泥棒や盗賊を指すだけでなく、暴動者や反乱者をも意味し得る。これは十字架上の犯罪人にも使われている(27・38)。ユダヤ人指導者たちは民を恐れていたために公然とイエスを逮捕する事はできなかった(14・5、21・26、46)。わたしは毎日、宮ですわって…つかまはしなかった ここでイエスが言おうとされたのは、ご自身は強盗などと違って公然と活動しているのだから、このように秘密裏に逮捕しなくてもよいではないかということ。

56 そのとき、弟子たちは…逃げ去った ユダを除いた11人の弟子たちも皆、逃げ去ってしまった、イエスが言われたことが成就した(26・31)。見捨てて(ギ)アフエンテス(ギ) これは「残して」とか「置いてきぼりにして」という意味の言葉。逃げ去った(ギ)エヒユゴン(ギ) 不定過去形が使われており、弟子たちが一瞬にして消え去っていったことを強調している。

参考図書 2月22日分と同じ。

聖書

マタイ26・47～56

タイトル

捕えられたイエス様

暗唱聖句

しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書いたことが、成就するためである。
マタイ26・56

目標

自ら十字架の死へと向かわれたキリストを覚え、信じ従う者となる。

導入

(松浦みち子)

理由もないのに、ある日突然「あなたを逮捕する!」と言われたらどうでしょう。きつと「いやだ、わたしは何もしていない!」と、抵抗し、逃げ出すことでしょう。

そんな時、イエス様はどうなさったのでしょうか。

ユダの裏切り

イエス様は弟子たちとの超越しの食事の席で、こう言われました。「あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ろうとしている」。弟子たちは口々に「まさか、わたしではないでしょう」と言い合いました。ユダも「先生、まさか、わたしではないでしょう」。「いや、あなただ」。イエス様はユダの裏切りをご存じだったのです。ユダはなぜ主を裏

切るようなことをしたのでしょう。ユダは弟子たちの会計係だったのでごまかしがバレることを恐れていたのかもしれませんが。聖書はユダにサタンが入った(ルカ22・3)と明確に記しています。サタンに心を支配されることはほんとに恐ろしいことです。イエス様と共に過ごした日々のは何もうも考えることができなくなってしまうのでしょうか。ユダは何度も弟子たちと一緒に祈ったり、話し合った場所にイエス様がいることを熟知していて、祭司長や兵士をつれてやってきました。彼らは剣や棒を持ってユダについてきました。ユダは「先生、いかがですか」と言っ、イエスに接吻したのです。

ペテロの行動

イエス様に手をかけ、捕えた大祭司の僕に、ペテロは「何をやるんだ!」と剣を抜き、切りかかってその片方の耳を切り落としました。すると、イエス様はペテロに「剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。それとも、私が父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。しかし、それではこうならねばならないと書いてある聖書の言葉は、どうして成就されようか」と言っ、イエ

3月

22日 礼拝メッセージ例

ス様自らが受難の道を選びとって進み行かれることをお示しになりました。そして、耳を切り落とされた僕の耳に手を触れておいやしになりました。

イエス様のお思い

イエス様は、ゲツセマネの園で血の汗を滴らせながら祈られ、「わたしの思いではなく、みこころがなるようにしてください」と、父なる神と一つとなって、救いの計画を実行に移すことを決心されたのです。イエス様はまことの神であるとともに、まことの人となられたお方です。苦難を避けたいお気持ちも持つておられました。ゲツセマネでは、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈つていらつしゃいます。しかし祈りの中で、苦難を自分のものとして引き受ける決意をなされたのです。イエス様がこの地上に誕生された目的は、何だったのでしょうか。神様の目的とご計画は、神の子のイエス様が十字架にかかって、罪人に下される罰を身代わりとなって受けることでした。そして、死んで葬られることでした。「すべてこうなったのは、預言者たちの書いたことが、成就するためである」とイエス様は明言されました。この事実を心から感謝して、主を信じ、従う

者となりましょう。

あかし

あなたは、いじめにあつたことがありますか？ いま、その苦しみの中にいますか？ ひとりの女の子のあかしをしましょう。

彼女はとってもやさしく、勉強もよくでき、スポーツも得意な元気な子でした。優しく親切な彼女は、多くの友達に好かれていました。ところが、中学生になってしばらくして、ある日、突然無視されるようになったのです。心当たりはありません。優しい彼女は、自分に何か足りないことがあつたのだと自分を責め、明るく振舞っていました。しかし、理由なく続く無視に心が傷つき、夜も眠れなくなつてしまいました。そんな時、クリスチャンの祖母から「夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に喜びが来る」（詩篇30・5）のみ言葉をプレゼントされました。これをきっかけに教会に来てイエス様のことを知りました。彼女は、弟子たちに裏切られてもゆるすイエス様の愛に触れ、クリスチャンとなりました。イエス様の愛は何とすばらしいでしょう！

♪弟子となしたまえよ（新聖歌404）

聖書 マタイ27・45〜56 テーマ 十字架上のイエス

序論

(金井信生)

受難週の今日は、私たちの罪の姿と、キリストの救いがあらわされた十字架を学びます。

一、罪がむきだしになるという

イエスが十字架につけられたとき、地上の全面が暗くなりました。これは父なる神とイエスとの間が断たれたことのしるしです。また、神無き世界の暗さ、罪深さを示しています。

これまでの覚悟を忘れて逃げ去った弟子たち、証拠もないのにイエスに不利な証言を次々と重ねる人たち、イエスの無実を知りながら、十字架刑を許したローマの総督ピラト、皆自分の立場を守ることに精いっぱいでした。正義に目をつぶって、周りに流される方を選びました。

また、イエスを嘲^{あざけ}って、つばをかけたり、頬を打ったり、いばらの冠をかぶせた兵士たち、そして十字架につけられたイエスを見て、ののしり続けた人たち、それぞれ自分の勝手な期待を押し付けたり、弱いものを嘲って

自分が何者かであるかのようにふるまう者たちです。

イエスは、この人間の身勝手な振る舞いをご覧になり、心を傷つける言葉を聞かれました。そして沈黙を通されました。やがてイエスの口から出たのが、(どうしてわたしをお見捨てになったのですか)と天の父に叫ぶ言葉でした。エゴイズムの罪のために神に捨てられなければならない人間を代表しての叫びです。

二、神に祈るという

イエスの(わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか)の叫びは、本来は痛みや悲しみの中で失望し、落胆し、神様に救いを求めている私たちの叫びです。イエスは、私たちの身代りになるために、罪人と同じ立場に身を置き、私たちが神に見捨てられなければならないところを代わりに見捨てられてくださいました。そして神の義と愛が一つとなった十字架で叫ぶとき、この祈りは神のもとに届きました。

イエスが最後に大声で「父よ。わが霊を御手にゆだねます」と叫び、息を引き取られたとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真二つに避けました。神殿の垂れ幕とは、神殿の至聖所に至る隔ての幕で、選ばれた大祭司だけが

一年に一度入る事が出来る幕です。最も聖なる神の臨在を表わす、至聖所への幕、神の臨在に触れるために血を携えなければ入る事のできない幕です。それが、十字架の上でキリストの血が流されきった時に、人の手ではなく、神様の手によって、上から下に真二つに裂けたのです。主イエスが贖いの使命を完了され、生ける神の臨在の前に罪ある人間が赦されて立つことのできる道が、この時に天より開かれたのです。

三、信仰が告白されるころ

十字架上の主イエスは惨めな姿のままです。十字架から降りることも、死から逃れることもありませんでした。天から声も助けもありませんでした。弱さと敗北の頂点としての死をイエスは迎えられました。しかし、百人隊長や、イエスの見張りをしていた人たち、つまり一連の出来事を最後まで見続けた人たちが、へまことに、この人は神の子であったと告白しました。彼らは、今まで自分たちが考えてきた救いとは違う、本当の救い、神からの救いを感じ、今まで当たり前と思い流されてきた自己中心の世界とはまったく違う世界があることを見たからです。

私たちはイエスのどの姿を見て、信仰を言い表すでしょうか。イエスの言葉や御業を通して、もちろん神の子救い主の姿を見ることが出来ます。日々の生活の中で、目に見える具体的な祝福を受けることも感謝であり、喜びです。しかし、絶望に捕らわれているときや、愛する者を失うときに、イエスの十字架を通し、他にはない神の救いを得ることが出来ます。

イエスは虐げられ、苦しみの中で何の抵抗もせずただ黙って十字架で殺されました。しかし、主イエスが息を引き取られたその時に、地震が起こり、墓が開きました。人間の希望が閉ざされるところが開かれて、絶望のどん底にも希望の光が大きく差し込んできます。

結論

イエスが私の罪の身代わりとなって十字架に死んでくださったことを信じ、感謝して受け入れましょう。神様の救いの御手にいつも守られて、希望のある幸いな生涯に進むことができます。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

45 地上の全面が暗くなって 暗やみは出エジプトの災厄の一つであり(出エジプト10・22)、終わりの日に起こることとして、預言書に記されている(アモス8・9、イザヤ13・10等)。次節は、この暗黒がイエスと父なる神との断絶の表れであることを暗示している。満月である過ぎ越しの季節に日食は考えられない(日食が起こるのは新月の時のみ)。中東の局地風「カムシン」による砂ほこりが、太陽を遮ったのかもしれない。

46 エリ、エリ、レマ、サバクタニ 詩篇22篇の冒頭部分。「エリ」のみヘブル語(アラム語では「エロイ」で、それ以外を当時の日常語であるアラム語。これは単なる詩篇の朗誦ではなく、まさにその時、イエスが経験していたことであった。肉体的激痛、精神的屈辱もさることながら、ゲツセマネの祈りにおいてイエスが何よりも恐れていた杯(26・39)は、この御父との断絶であった。しかしそれは、贖罪の成就のためには、どうしても飲み干されねばならない杯であったのである。

47 あれはエリヤを呼んでいるのだ ヘブル語の「エリ」がエリヤに聞こえたのだろう。当時のユダヤでは聖徒が助けを必要とするとき、エリヤが現れるという言い伝えがあった(11・14参照)。

48 酔いぶどう酒 ローマ兵が飲用した、ワイン酔を水で薄めた飲料であろう。マルコでは、エリヤが登場するかを見るために、兵が悪意をもって飲ませようとした印象を受けるが(マルコ15・36)、マタイではそういう印象は受けない。いづれにせよ「彼らは…わたしのかわいた時に酔を飲ませました」(詩篇69・21)という預言の成就である。ちなみに「没薬をませたぶどう酒」(マルコ15・23)は苦痛を緩和させるためのもので、別物である(イエスはそれを拒まれた)。

49 エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう 興味本位もあるだろうが、人々がイエスを、(言い伝えが正しければ)エリヤが助けに来るような義人と認めていたことが示されている。

50 イエスはもう一度大声で叫んで、ついに息をひきとられた 口語訳は四福音書すべてでイエスの死の様子を「息をひきとられた」と訳しているが、原語では表現に差

異がある。マルコ、ルカは文字通り「息をひきとった」という意味であるが、ヨハネは「**ギ**」プネウマ（息、霊の両方を指しうる）を委ねたと記す。マタイの場合は、マルコ・ルカとヨハネの中間あたりの表現と言えよう。

51〜53 神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた 至聖所の前に設けられた「第二の幕」（ヘブル9・3参照）。「裂けた」の動詞は受動態で、動作の主体が神であることを示している。至聖所は、年に一度、大祭司ただ一人が、自分と民の罪の贖いのために入ることを許される所（ヘブル9・7）。その隔ての幕が裂けたことは、イエスの死によって、旧約の祭儀は終焉を迎え、新しい時代が始まったことを象徴している。今や、罪のための最上の犠牲がささげられた。「わたしたちはイエスの血によって、はばかることなく聖所にはいることができ、彼の肉体なる幕をとおり：はいって行くことができる」（ヘブル10・19〜20）。**地震** マタイだけが、イエスの死の後に地震があったことを記している。眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った：イエスの復活ののち、墓から出てきて：多くの人に現れた 出来事の前後関係が難解だが、様々なことを考慮すると、ここで言われている地震

は実際には、イエスのよみがえりの後（28・2と同じ地震）のことかもしれない。聖徒たちの復活は、その時実際にあったのかもしれないが、やがて起こる聖徒のよみがえりの現実を象徴する表現として、ここに記されているのかもしれない。いずれにせよ、この記述がここに置かれていたことは、聖徒のよみがえりが、イエスの十字架と復活に直接に依存するものであることを象徴している。イエスが死に、そして復活されたゆえに、彼を信じる者の復活もまた確かにされるのである。

54 まことに、この人は神の子であつた イエスの神性的性質と無実性、そしてローマ（ならびにユダヤ）の罪深さを認める告白であろう。この告白が異邦人によってなされたということは皮肉であると共に、救済史的な転換点（異邦人への救い）を指し示すものでもある。

55〜56 遠くの方から見ていた女たち 最後まで主の苦しみを見届けたのは、女性たちであつた。主に対してより大きな忠誠心を表した彼女たちが、数日後、主の復活という至上の喜びを最初に伝えるという光栄にあずかることになる。

参考図書 3月8日分と同じ。

聖書

マタイ27・45〜56

タイトル

十字架上のイエス様

暗唱聖句

わが神、わが神、どうしてわたしをお見

捨てになったのですか。 マタイ27・46

目 標

身代わりの十字架の意味を知り、キリストを信じて救いを得る。

導入

(松浦みち子)

イエス様の弟子ユダの裏切り、これまでの愛や親切、それらを忘れ、「十字架につけよ!」と叫んだ群衆。何の罪も認められないのに十字架に引き渡したローマの総督ポンテオ・ピラト。イエス様のお心はどんなだったでしょう。イエス様は黙ったまま、何の抵抗もされずに、十字架にかけられました。

十字架の上で息を引き取る

イエス様が十字架にかけられて後、昼の12時になった時、突然、日が陰り、地上の全面が暗くなって、3時間もの間、暗闇が続きました。いったい何が起ったのだろうと人々は不安になりました。預言者アモスは、この日、この時のことを預言しています。「主なる神は言われる、『その日に

は、わたしは真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くし、あなたがたの祭を嘆きに変らせ、あなたがたの歌をこごとく悲しみの歌に変らせ、すべての人に荒布を腰にまとわせ、すべての人に髪をそり落させ、その日を、ひとり子を失った喪中のようにし、その終りを、苦い日のようにする』(アモス8・9〜10)。

十字架上で苦しむ独り子の姿を見るに忍びず、父なる神は顔を隠されました。それで全地が暗くなったのです。暗闇が続く中、午後3時ごろ、イエス様は「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と大声で叫ばれました。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味です。イエス様の苦しみは、十字架に釘付けられた体の痛み以上に、父なる神が顔をそむけ、完全に見捨てられた心の痛みであつたのです。そして最期に、もう一度大声で叫んでついに息を引き取られたのです。

罪の罰とは、神との関係が完全に絶たれることであり、絶望以外の何ものでもありません。聖書の四福音書には、イエス様の十字架のことが七つ記されていますが、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という言葉だけが、マタイとマルコに2度も記されて

います。イエス様は十字架にかかり、私たちの身代わりとなつて、神の裁きの苦しみを「ご自分の身に引き受けて下さったのです。何という愛でしょう。

不思議なできごと

イエス様が息を引き取られた瞬間、神殿の幕が上から下へと真つ二つに裂けました。また、地震があり、岩が裂け、墓が開いて主を信じて死んだ聖徒たちが生き返りました。これらは、イエス様の死によつて罪の贖い^{あがな}が完全に成し遂げられたことを意味します。神殿の幕は至聖所に至る隔ての幕でした。しかし、イエス様の血が流されたことによつて、人の手によらないで神ご自身の手によつて隔ての幕が上から下へと引き裂かれたのです。そして、罪ある人間が神の前に罪ゆるされて立つことのできる道が開かれたのです。何という恵みでしょう。

百卒長の告白

イエス様の十字架の様子やその死を見つめていたローマの百人隊長や兵士たちは非常に恐れ、「まことに、この人は神の子であつた」と告白しました。他にも十字架を取り囲んでいる人々が多くなりましたが、イエス様の本当のお姿を悟る人はそう多くありませんでした。あなたはどうか告白しま

すか? 「イエス様、私の身代わりに十字架で死んで下さり、罪を赦^{ゆる}してくださいとありがとうございます。また、いつでも神様に近づき祈ることができるよう道を開いて下さって感謝します」と、祈りましょう。

十字架の愛による実話

北海道旭川の塩狩峠の頂上近くに汽車が来たとき、突然客車がずるずると後ずさりする事故が起りました。そのままだでは客車は転覆し、乗客は死んでしまいます。その中に長野政雄というクリスチャンがいました。彼はブレーキが利かないとわかると、自分の体を投げ出し客車の下敷きとなつて列車を止め、犠牲の死を遂げました。なぜ、そのような行動ができたのでしょうか。長野さんは最初キリスト教が大嫌いでした。ある日、吹雪の中で路傍伝道している牧師に出会つたのです。「みなさん、イエス・キリストは一つ悪いことをしませんでした、この世のすべての罪を背負つて十字架で死なれたのです。そして、信じる者に永遠の命を与えられたのです。神は愛です」。キリストを信じた長野さんは、この機におよんで犠牲の愛を実践したのです。何と尊い死でしょうか。

♪じゅうじか♪ (ふ14)

牧羊ひろば



日田福音キリスト教会 教会学校

あなたは覚えているだろうか。牧羊者二〇〇九年Ⅲ巻「牧羊ひろば」で紹介された中津江教会学校を。

●さよなら中津江教会学校

日田福音キリスト教会には二つの教会学校があります。「エンゼルクラブ」と「中津江教会学校」です。九州北部の山間部、熊本県との県境にある旧中津江村の信徒宅で行っていた中津江教会学校。毎水曜日3時から行っていました。全校生約50名の中からいつも5名の子どもたちが出席。ところが二〇一二年中津江小学校は上津江小学校と統合し津江小学校となります。中津江小学校（信徒宅隣）は廃校。さらに今年春、信徒宅の子弟末子が、小学校を卒業し中学校へ。これまで彼と共にCSに励んできた一級下の小学生たちとは別々に。信徒子弟教育を中津江CSの柱の一つにあげていたこともあり、これを

もって中津江教会学校を終了と致しました。

……で話は終わりません。中津江教会学校終了の事で祈っていた時、一つの示唆が与えられました。ヒントになったのは、九州教区で進めようとしている次世代（子ども、中学生、青年）を育てていくための計画、「ネクストジェネレーションプロジェクト」（通称ネクジェネ）です。その特徴は継続的育成。これまでのCS部、中高生BC、青年部の枠を取り払い、ネクジェネとして青年がユースを導き、ユースがキッズを導くような、相互に関連し合い成長することができると目指しています。「そうだ！ 中津江も小学生の教会学校ではなく、中学生も取り入れて、中津江ユースクラブにしよう！」そう導かれました。

ですが問題が一つあります。部活です。「主の山に備えあり」（創世記22・14）。時を同じくして二〇一四年春、津江小学校は、津江中学校と統合し小中一貫校になりました。しかも水曜日には、職員会議のため部活は休み。

ハレルヤ！ こうして、神様の後押しを得て、中津江教会学校は円満終了、新たに中津江ユースクラブがスタートしました。

●中津江ユースクラブ

毎水曜日午後4時～6時。

中津江CSからの変化は二つ。

①聖書を読む。

教会学校の時は、賛美、祈り、ゲーム、み言葉暗唱、お話といったプログラムでした。成長している子どもたちに合わせ、ゲームを止め、その週の聖書の箇所を共に読むことにしました。設題を出し、受け答えしながら、メッセージを進めます。山の子どもたちの頭に、自分で聖書を読んだという記憶が残るように。

集会のあと、手作りおやつをいただくこと、宿題をすることは変わりません。

②本気で野球をする。

教会学校の宿題タイムの後は、サッカーをしていました。ユースクラブになると同時に、新中学生（七年生といます）が野球部に入部したこともあって、廃校になった小学校グラウンドで、軟式野球をしています。野球といっても、全員で5名程ですから、フリーバッティング

状態ですが。私が本気で投げても普通に打ち返されて凹んでいます。子どもたちは、毎週楽しみに野球道具をもって、ユースクラブに集まります。子どもたちの心と体と魂にユースクラブの喜びが染みこむことを願っています。一番楽しんでいるのは私ですが。

●エンゼルクラブ

〈沿革〉

一九六八年日田市内に日本地方伝道団の開拓伝道として日田福音キリスト教会がスタートしました。2人の牧師と2度の転居を経た後、一九九三年日本イエス・クリ



中津江CS 野球

スト教団に加入し、山本敬夫師ご夫妻が赴任され、さらに教会学校の働きが進められました。芋掘りや田舎の旧家を利用したのデイキャンプなど、盛んなCS活動がなされました。毎週土曜日には中高生の集いがもたれて活発さがうかがえます。教会学校で育った3名(後藤健一師、清水順子神学生、宇野真佑美神学生)が献身されたことは教会として大きな喜びです。

二〇〇八年、私(竹崎)が赴任し現在に至っております。

〈概要〉

CS教師は3人。牧師と壮年(小学校校長)と婦人(主婦)です。日曜日午前9時半から10時半まで。礼拝と分級を行っています。

信徒子弟が平均4名出席しています。

〈特別プログラム〉

①チャペルフェスタ

年2回、7月と10月に行います。日曜日午後2時から1時間半ほど、集会とお楽しみタイムをします。数年前までは、出店のような形でお楽しみゲームをしていました。輪投げ、射的、水鉄砲射的、ヨーヨーつり、フラ

フープ、サッカーシュートなどです。ポイント制にしてフラインクボテトやフランクフルト、かき氷等のおやつをプレゼント。

最近では、好評だったクッキー作りやパン作りなどの料理系を行っています。楽しい料理作業をして、お待ちかねの出来上がり待つ時間にメッセージします。この企画こそ子どもはいつも以上に話を聞きます。この企画は、教会学校教師の賜物を活かすというテーマもあって行っています。11月には「ピザ作り」を実施予定です。



チャペルフェスタ パン作り

② 夏期キャンプ

かつては、キャンプ場のロッジを借り、教会あけてのファミリーキャンプのように行っていました。現在は参加者数と奉仕者の状況に合わせて、少年の家などの施設が供給される施設を利用するようにしています。公共施設を使う積極的理由は、子弟が誘うお友達が参加してくれるようになり、バイブルキャンプという意味合いを強めたかったからです。CS教師がキャンプ裏方ではなく、子どもたちと共に遊び、学び、共に時間を過ごすことに集中できるようにとの思いがあります。



CSそうめん流し

③ 花の日慰問

花の日とクリスマスに高齢者施設への慰問をします。施設内を賛美し巡回。3箇所各20分の集いを持ちます。賛美と懐かしメロディー。そして元CS教師の教会役員が齒に衣着せず十字架と復活、救い主キリストをまっすぐ伝えます。一般施設内での、宣教つぷりにビツクリです。30年来続けているからこそその信頼関係だと実感します。おじいちゃん、おばあちゃんは幼い子どもたちが大好きです。小さければ小さいほど人気があります。高齢者施設への慰問は、子どもたちだからこそできる（喜んでいただける）主の働きだとしみじみ思えます。

（竹崎光則）

救い主なる神を知る

マタイ・21

●旧約④ヨシユア

| 行事 | テーマ | 聖書 | 暗唱聖句 |
|-----------|------------------|---------------|--------|
| 1月4日 新年礼拝 | ヨシユア① 雄々しくあれ | ヨシユア 1:1~9 | 同 6 節 |
| 11日 | ヨシユア② 約束の地 | ヨシユア 3:1~17 | 同 17 節 |
| 18日 | ヨシユア③ エリコの城壁 | ヨシユア 6:1~20 | 同 5 節 |
| 25日 | ヨシユア④ 神に仕える決心 | ヨシユア 24:14~15 | 同 15 節 |

●キリストの教え

| 行事 | テーマ | 聖書 | 暗唱聖句 |
|------|-------------|--------------|--------|
| 2月1日 | 幼な子のように | マタイ 18:1~5 | 同 3 節 |
| 8日 | 迷子の羊 | マタイ 18:12~14 | 同 13 節 |
| 15日 | 七たびを七十倍するまで | マタイ 18:21~35 | 同 22 節 |
| 22日 | 仕える生き方 | マタイ 20:20~28 | 同 28 節 |
| 3月1日 | 一番大切な戒め | マタイ 22:34~40 | 同 37 節 |
| 8日 | 主の再臨に備える | マタイ 25:1~13 | 同 13 節 |

●キリスト受難

| 行事 | テーマ | 聖書 | 暗唱聖句 |
|----------|-----------|--------------|--------|
| 3月15日 | 契約の血 | マタイ 26:26~29 | 同 28 節 |
| 22日 | 捕らえられたイエス | マタイ 26:47~56 | 同 56 節 |
| 29日 棕櫚の日 | 十字架上のイエス | マタイ 27:45~56 | 同 46 節 |

*ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。

神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

教師養成講座は、今号も 神戸中央教会の田中恵子姉に「♪さんび・・・まず、あなたがいきいき！ No.3」を書いていただきました。「牧羊ひろば」は日田福音キリスト教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み